
乾杯！

蝶佐崎ダイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乾杯！

【Nコード】

N2623I

【作者名】

蝶佐崎ダイ

【あらすじ】

女性は墓の前に立つ。立ち、誓う。

「君たちの物語は、俺が必ず、後世に語り継いでやる」

一人は、騎士団員。

一人は、何でも屋。

一人は、某国の宰相。

これは千年の時を生きた一人の女性を巡って起こる、三人の不思議な物語である。

完結しました！

回想

草原。風の吹き荒れる草原に、女性が一人立っている。

彼女は長髪をなびかせ、ローブをはためかせ、目の前に広がる墓地を見下ろす。

この墓地は、近辺に人が住む前からここに在った。故に誰も、何者がここに埋められているのか、知ることはなかった。

そしてここには、近くの森に住む魔獣まじゅうですら立ち入ることができなかった。故に、人々はここを「聖なる土地」と呼んだ。

「聖なる土地、ねえ……」

女性は呟きながら低く笑い、手に持つ沢山の花束を、大理石のように白い墓の一つ一つに手向けていく。

何故彼らがここに永久に眠らなければならなかったのか。彼らがここで戦死したからだ。歴史にも残らない遙か昔、彼らがここで命を散らせたからだ。

では、彼らの物語は永遠に闇に葬り去られてしまうのか。

「否」

女性は寂しい笑みと共に、腰に提げていた剣を地面に突き立て誓いを立てる。

「俺おれが生き続ける限り、君たちと生きた日々が世界から消えることはない。この剣にかけて誓おう。君たちの物語は、俺が必ず、後世に語り継いでやる」

それだけを言い切った女性は、墓地から背を向けて歩き出した。

遙か昔、人々は神隠しに怯えていた。人外なる魔境、あり得ない事柄ことに恐怖していた。

それ故に人々は自分たちを助けてくれるであろう「神」に助けを

求めた。神々はそれに応え、神隠しの発端の生き物に迎え撃った。その中、神と人との間に、幾人もの子ができた。子は人の体に神の力を宿し、人々から崇められ、自ら先陣を率いて戦った。だから、子が死ぬのも早かった。

「俺は君たちのように死ぬわけにはいかない。君たちが守った世界がどのように移り変わるのか、見届けなければいけないんだ」

女性は呟きながら、ふと周りを見回す。森に入ったからだろう、昼とはいえ辺りは暗い。

彼女が立ち止まった場所に近い茂みが、乱暴に揺れる。茂みから獅子が飛び出し、女性の頭部を噛み砕かんと飛びかかった。

女性は獅子の姿を確認すると、興味を失ったかのように肩を竦め、獅子から視線を反らす。そしてなおかつ牙を避けると獅子の喉元を掴み、握り潰した。

「甘い」

森の中に絶叫が響き渡った。

回想（後書き）

蝶佐崎ダイと申します。初投稿です。

何とぞ至らないところもあるとは思いますが、よろしく願います！

ぜ、ぜひ感想書いてやってください（土下座

人を想う涙・1

「うわーっ！」

ジルは半泣きで森の中を突っ走っていた。

彼の前に大蛇らしいものが立ち塞がるが、ジルは腰の刀で両断し、その脇をすり抜けて駆ける。

その腕前は並大抵のものではない。

「賭けに手を出すんじゃないかったーっ！」

しかし体格や半泣きの顔、叫ぶ声は少年のそれであった。事実、彼は昨日二十歳を迎えたばかりだ。

実は彼、この「魔の森」の近くの国の騎士団の兵士だった。若年ながらも第三席の座を務めている。

そんな彼が何故こんなところにいるのか。

昨日二十歳を迎えた彼は、団長、副団長も含めた騎士団全員で祝ってもらい、それはもう幸福の絶頂にいた。酒の勢いも借りて、気分も絶好調である。

そんなとき、酔った一人の兵士が、こんなことを言い出した。

「ポーカーでもしないか？」

あれよあれよと賛同する声があがる。

それを眺めていた団長が、酒を煽りながらぽつりと呟いた。

「ならば、掛け金を抜きにして、一番負けた者が罰ゲームと称してなにかやるのはどうだ？」

それに食らいつかない馬鹿はいない。自分がとても負けるとは思っていないかったジルもその意見に頷き、誰かの言った「一番負けた奴は魔の森を通り、聖なる土地まで行って、墓の一つに花をやって帰ってくる」という案に決まった。

そして、ジルは大敗を喫し、森の中を駆けている。
理由を思い出したジルは、苦い顔で頭をかきむしった。

「あーもう！ 思い出さなかったらよかった！」

ジルは、実は怖がりだった。特に幽霊、妖怪、魔物やらが苦手だった。魔物は剣術が上達するにつれ少し恐怖が薄れたものの、それが通用しないものは相変わらず怖い。

森の中は日が照っていいようにまいと、常に薄暗い。いつ肩を叩かれて、振り返った先に幽霊がいてもおかしくない。

だから彼は幽霊がついてきませんようにと必死の思いで走っていた。

これから幽霊がたくさんいそうな墓地に向かうというのに、何ともおかしい話である。

「ぎゃっ！」

不意にジルは石につまずき、地面に転んだ。慌てて周りを見回すが、幸い魔獣は見当たらない。

安堵した彼だが、肩を叩かれて飛び上がった。

「君、大丈夫？」

「うひゃあっ！？」

振り返れない。声からして女のようなだが、振り返った先に首の長い女がいたらどうしよう。目鼻のない女だったらどうしよう。振り返ったらいきなり子供を渡されて、その子供がどんどん重くなったらどうしよう。

やけに東洋の怪談物に詳しい騎士である。それはさておき、と頭を悩ませた彼に、後ろの人物は肩から手を離した。

「ごめん、追い付かれた。ちょっと木の陰にでも隠れててくれないかな」

「……へ？」

その言い種に思わず振り返る。振り返って、ジルは思わず言葉を失った。

金髪の美女がロープをはためかせて立っていた。

女性はそれすらも絵になるしかめっ面で、身の丈はある巨大な剣を抜く。

剣を見たことで、ジルの頭が冷えた。同時に、周りから低い唸り声が聞こえ始める。

「……困まれた？」

呟いた彼に、女性はそっけなく頷いた。

「そういうこと。君、刀を持ってるみたいだけど、遣える？」

「はい。あの……助太刀します」

立ち上がり抜刀したジルに、女性はにやりと笑う。

「いけるクチみたいだね。じゃ、頼もうかな。こっちも困ってたところだし」

自分たちのだらだらとした会話に飽きたのかもしれない。魔獣が一斉に飛びかかってきた。

彪の胴体を薙ぎ払い、返す刀で鳥の羽を斬る。牙を刀に合わせて弾き、命の危機が逸れた隙に首をはねる。

一息ついた彼だが、飛んできた怒声に飛び上がった。

「小僧、後ろだ！」

慌てて振り返ったときには遅い。真後ろで虎が牙をジルに突き立てようとしていた。

しかし、横から虎に剣が突き刺さり、虎はそのまま横に倒れた。剣を抜いた女性に厳しい眼を向けられる。

「油断するな！ 戦場で今のような隙を見せたら死んでいたぞ」

「済みません」

それだけ言っつて、また刀を振るう。

初対面の女性に、自分たちが生業とする戦のことで叱責されたというのに、不思議と怒りはわいてこない。

それどころか、団長に怒られたかのような感覚さえした。

「気を抜くな！ 目の前で犬死にされては、胸くそが悪い」

暴言が飛び、我に返る。あとはただ必死に刀を振るっていた。

鳥頭の豹を切り捨て周りを見回すと、辺りには魔獣の死骸が散らばっていた。

「あ、終わったよ」

ジルの刀は血で真っ赤に染まっていたが、その声をかけ、岩の上に腰を下ろした女性の剣も負けず劣らず朱い。

ジルは彼女に歩み寄り、一礼する。

「何か？」

「あの時命を助けていただき、ありがとうございました」

「ああ。今度からは気をつけるんだよ」

あつさりそう言った女性は、そういえば、と不振そうにジルを見つめた。

「君、何でこんなところにいるんだい？」

「それが……」

事情を説明するジルの顔は赤い。対して話を聞く女性の顔には苦笑と呆れが広がっていた。

「君、ハメられたんだよ」

「ええっ!？」

「知らない？ こうやってさ……」

どこからかトランプを取り出した彼女は、その場でちょこちょことやってみせる。

それを見せたジルは、呆氣にとられた。

「ほら」

「……そんなあ!？」

「ドンマイ」

苦笑を見せた女性は立ち上がる。

「ま、森を抜けたらすぐそこだしね。道、分かる？」

「済みません……」

「道理で慌てていた訳だ」

しぼんだジルに肩を竦めた女性は手招きした。

「おいで。案内してあげるよ」

慌ててジルはその背中に追い付いた。
隣を歩きながら、恐る恐る聞いてみる。

「あの……貴女、幽霊じゃありませんよね」

「……………」

本気で呆れられたと察知したジルは、即行で頭を下げた。

「すみません僕が無礼でした！」

「全くだ。俺は生きてるよ」

俺、という単語に首を傾げる。

女性は頭に手をやった。

「まあ、この頃顔色が悪いから、見間違えられたのかもしれないけど」

「え……そうですか？」

「うん。でも、まだ死ぬ気はないからね」

人を食ったように笑う女性とジルは、森を抜ける。

人を想う涙・2

広がった壮大な景色に、ジルは言葉を失った。

青い、吸い込まれる空から風が吹き降りてくる。風は若草色の草原を揺らし、草原は大昔からここにそびえる白い墓を避けるように揺れる。

誘われるように一歩踏み出したジルは、道中摘んだ花を手に、吸い寄せられるように一つの墓に歩み寄る。

「そいつに手向けてくれるんだね」

墓に花束が手向けられているのを見て、そして後ろからかった声に思わずジルは振り返った。

女性は嬉しそうに顔を歪めていた。

「貴女が花束を置いたんですか」

「そうだよ」

貴女は何者なんですか。

ジルはその問いを呑み込み、花を花束の隣に添える。

しばらく黙祷したジルに、女性はぽつりと呟いた。

「ありがとう」

それから二人は国に戻った。

聞けば、女性は旅人らしい。昔ここにも一度立ち寄ったことがあったので、道案内もできたとのこと。そして今は、ジルの祖国を目指していたとのこと。

丁度ジルも帰るところだったので、お礼を兼ねて騎士団が詰めているトレラ砦を案内することにした。自分たちを見つけた兵士が慌てて開門するのを見ながら、ジルはどうかさまを暴いてやろうか

思案中である。

と、女性の口笛が聞こえた。

「何にも変わってないね、ここは」

「……はい？」

思わず女性を見たジルは、荒々しい足音にまた前を向く。

「おうおう、第三席が魔の森からのご帰還だ！」

門をくぐって現れたのは、長身の男性だ。良く言えばガタイの良い、悪く言えば図体のデカイ、ゴツい体格で、日に焼けたような肌に黒い髪と瞳が良く合っている。

ジルは男性を睨んだ。

「誰ですか、イカサマしたのは。副長、その顔からして知ってますよね」

「そうカリカリすんなって。実はオレなんだけどな。まあ、そんなことより、だ」

「ええっ!？」

それはスルーして良い問題ではないはずだ。突っ込むかどうか激しく悩んだジルだったが、副団長が眉を潜め女性を眺めたのを見て、頭が冷えた。

「こちらの美人さんはどなただ？ トレラ砦の見学は明後日の筈だが。それに、美女は美女なりの礼儀ってもんがあるだろう。せめて動きやすさ重視で男装に走るのは止めてほしかったな」

「おっ、上手いこというね」

女性が嬉しそうに両手を叩く。慌てて副団長に説明した。

「この方とは魔の森で会いまして、命を助けてもらったんです。招待してはいけませんか？」

一転、渋い顔になった副団長である。

「魔の森かあ……まさか、暗い森に怯えて闇雲に走って転んだところに手を差し伸べられた、なんていうなよ？」

ジルは否定できなかった。それもあつた。推測というのに、ピンポ

イントでそちらだけ当てるのも、中々すごいのではないか。

女性がジルの肩を持った。

「あ、違う違う。確かに転んではいたけど、手なんか差し伸べてないよ」

「突っ込み所満載のような気がするが、まあスルーしようかね。で？ あんたはジルをどんな要件で助けたんだ？」

「普通に魔獣と戦ってて。彼が不覚にも後ろをとられたから、そいつを殺しただけ」

「不覚、だあ？」

副団長の瞳が剣呑な輝きを帯びる。

「おいクソガキ、この騎士団の第三席ともあるう騎士が、女性ごときに助けてもらったあ、何事だ？」

「心配するな」

思わず、その声に三人は砦の奥から歩いてくる人物を見た。

「その人には、オレもお世話になった」

人を想う涙・2（後書き）

前回かなり長かったようで……（汗

人を想う涙・3

「団長！」

金髪碧眼で、寡黙な大将は忠義に厚く、誇り高い。彼が頭を下げたことがある相手は、両親と国王だけとの話も聞く。実際、ジルは団長が頭を下げたところなど、一度も見ることがない。

その団長が、女性に向かって、静かに頭を下げた。

「！？」

副団長も驚愕している。

「お久し振りです」

女性は二人を無視してひょうひょうと話しかける。

「そうだね。いくつになった？」

「今年で三十に手が届きます」

聞いた彼女の目が、薄く細められた。

「あれから十年経ったか」

素っ気なく頷いた団長が、背を向けた。

「トレラ砦に招待します」

団長が先頭を歩き、その後ろを女性が、またその後ろを副団長とジルがついていく。

ジルは副団長につつかれた。

「ジルお前、どんな傑物つわものを連れてきたんだ。団長が頭下げるなんざ、初めて見たぜ」

「僕もです。というより……」

楽しげに団長に話しかける女性を見ながら、ひそひそ話を続ける。

「正直あの女性があんなに凄い方だったとは、思っていませんでした」

「聞こえてるよ」

「うぎっ」

ジルは飛び上がった。その彼の頭の上に、女性が腕を置く。

「そういえばだけど、君たちの名前は？」

「オレはガラナ。ガラナ・スフレだ。副団長を務めてる」

「僕はジルって言います。ジル・ローゼンです」

「ん。俺はジュン。ジュン・タチバナだよ」

おかしな名前に、思わず副団長と二人、顔を見合わせた。ジュンはまだありそうな名前だが、タチバナというのはあまり聞かない名だ。

二人の疑問に気付いたのか、ジュンは苦笑しながら肩を竦める。

「遙か遠く、東洋に日本って国があるのは知ってるかな？ 俺の旦那はあそこの出身でね。まあ、俺も日本出身なんだけど」

「へえ！ すげえな！」

「遠いところをわざわざ！ 何しに来られたんです？」

聞くと女性は笑いながら、前を歩く団長を指差した。

「お墓参り。あの堅物に会うつつもりはなかったんだけどね」

とたん、ジルは自分でも表情が強ばるのが分かった。

「……そうですか」

いきなり、前方の団長が壁を蹴った。

「!？」

彼の奇行に三人で飛び上がると、団長は嫌々のような顔でジュンを睨み、蹴った壁を指差した。

「覚えていますか。あんたがかけた魔術」

「ん？ ああ、思い出した！」

顔を明るくしたジュンが、思い切り壁を蹴った。

「ジュンさんまで!？」

「何しやがる!？」

すると、団長が蹴ってもびくともしなかった岩の壁が、いともかんにたんに碎ける。そこから現れたのは、精巧に作られたと一目で分かる、細長い刀だった。

口をへの字にした団長がそれを取り出す。

「昔あんたに冗談で隠されて、あれ以来取り出せなかったんですよ。しかも先ほど、会う気は無かったと仰いましたが。つまり、俺は三席があなたを連れてこなかったら、俺は一生刀を取り出すことが出来なかったと……」

説教にジュンは引きつった笑みを浮かべて、酒場を指差した。

「お酒が飲みたいなあ！」

あからさまな話題転化にジルはずっこけた。副団長はがつくりと脱力し、団長は肩を落とした。

「……相変わらずお酒は大好きなようで」

「生まれたときからそうだからね。たかが十年じゃ変わらない変わらない」

からからと笑ったジュンが、鼻歌混じりに駆け出した。

ジュンが平気の平左で酒の瓶をあけるのに比例して、他の兵が集まってきた。

やがて、どんちゃん騒ぎになって、ジルの時のお祝いのような、賑やかな場になった。

人を想う涙・4

気が付くと、周りの兵は皆倒れている。単に酔いつぶれたただけだ。ジルもその中の一人だったらしいが、ふと目が覚めた。

近くで団長と副団長が肩を寄せあつて寝ている。

ジユンを探すと、外のバルコニーから、夜の景色を見ていた。

「ジユンさん」

隣に並ぶと、彼女は楽しいとは別種の笑みを浮かべながら、虫が奏でる音と、草が風に吹かれて揺れる音を聞いている。

やがて彼女は、閉じていた目を開いた。

「ジル君。目が覚めちゃったのかな？」

「みたいです。あの……」

ジユンが瓶を引き寄せる。そのまましゃがみこむ。

「僕が花を置いた墓は、誰の墓だったんですか？」

彼女の表情が、強ばった。

「すみません！ 無礼でした、やっぱり今の質問無しで！」

「いや」

ジユンは悲しい表情を隠そうとせず、膝に顔を埋めた。

「旦那だよ」

ジルは、声を出せなかった。彼女はそれを知ってか知らずか、話を続ける。

「性格はそうだな……団長君にそっくりだった。騎士っていうより戦士みたいで、負けず嫌いで、強くて、格好よかった。最後は暗殺で倒れたんだけどね」

「……そんな」

「だから、あれは堪えたなあ」

無理に声を出した彼女は、顔を上げ、見える満月の光を一杯に浴

びる。

その顔に、真珠のような涙が一筋、流れ落ちるのを見た。

ジュンは夢中で瓶の酒をあおる。ジルが静止の声を出せないから、飲み続ける。

やがて、彼女は完璧に瓶を飲み干した。瓶を置いた彼女は、静かに瞳を閉じ、安らかな寝息をたて始めた。

ジルはただ、その光景を眺めていることしかできなかった。彼の頬に、冷たいものが流れ、顎を滑って落ちた。

人を想う涙・5へ邂逅・1

「優しいんだな」

後ろからかけられた声に、とつさに反応できなかった。振り返ると、風変わりな男性がテラスにもたれてこちらを見ていた。

錆色と呼ばれる、錆びた鉄のような茶色の髪に、灰色とも銀色とも言えない瞳。髪は細く腰まで伸ばし、三つ編みにしている。顔にはフレームの細い眼鏡をかけ、笑みを彼に向けていた。

「あなたは……？」

「ただの覗き人だ。気にするな」

するりと言った彼は、眠るジュンに近寄り、彼女の抱き抱える瓶を覗む。

「飲み干したか。馬鹿め」

男性は細い長身で人を避けながら中に入っていく、やがて酒の入ったコップを持ってきた。

「久々の酒だ」

嬉しそうに言った彼は、飲み干すこともなく、ちびちびと酒を飲む。まるで、大事に取っておくように。

小さく一息ついた男性は、優しくジュンの頭を撫でた。

「こいつは、可哀想なやつだよ。置いていった俺達が言うのもなんだがな、この時代じゃ、あいつの子供時代を知るやつはもう誰もいない。独りぼっちなんだ」

コップを置いた男性が上を向き、満月を恨むように覗む。

「昔の友や仲間みんな逝ってしまった。唯一、ずっと一緒にいたあの人まで逝ったんだ。今、こいつは本当に独りぼっちなんだ」

涙声になった彼が手で顔を覆うのを見て、シルは我慢できなかった

た。ジルはジュンと男性を、抱き締めた。

どうしてそうしたのかは分からない。ただ、涙が溢れてきた。自分までもらい泣きしてはいけなないと、嗚咽をかみ殺す。涙を見られなくなかったから、下をむく。

ふと、ジルの頭を撫でた手があった。顔を上げると、涙に濡れた顔を月夜に光らせる男性がとても辛そうに笑っていた。

「ありがとう」

謝辞に、ジルは首を振る。

この男性が誰なのか、分かった気がした。男性はジルの腕を解き、テラスに腰かける。震える手でコップを持ち、あおる。

「……こいつの話をひとつする。こいつは、神の子だった。周りからは賞賛の眼で見られていた。しかしこいつにとつて、そんな血に一つもいいことはなかったんだ。体の成長が遅い。世界を守らなければいけない。何より、周りの人間に置いていかれる」

ジルは置いていかれるという言葉に寒気を覚えた。

「よく苦しんでいた。神の子がなんだ。世界がなんだ。世界と親友を秤にかけて何が悪い。どうして死んじゃ駄目なんだ。みんなのあとを追っちゃ駄目なんだ。そう、叫んだ声も聞いた」

男性は厳しい瞳で、コップの底を睨み続ける。

その底に、水滴が一粒、吸い込まれるように落ちた。

「俺が死期を感じたときも、淳は苦しんでいた。俺が死んだらあとを追ってくるかもしれないと思って、怖かった。だから俺は一つ、こいつに呪いをかけた」

これは懺悔だ、とジルは理解した。

大切な女性を置いて逝ってしまった幽霊の、悔いても悔やみきれない告白だ。

人を想う涙・5へ邂逅・2

「死ぬな。俺達を守りたかった世界がどうなったのか、しっかり見届けてからこっちに来い。そう、遺書に書いたんだ」

我慢できず、ジルの涙腺が決壊した。

どこが呪いなものか。彼女に死んでほしくない。だから理由を見つけて生の世に縛り付けた。

どこが悪いのだ。

泣きじゃくる彼に、男性はしばらく呆氣にとられたのか、一言も話さなかった。

やがて、苦笑を隠しきれなかったような表情で、ぽつりと漏らした。

「やはり、優しいな」

「どこが……ですか！」

「初めて出会ったばかりの者のために泣いてくれる。見ていると、救われたような気になってしまう」

寂しげな笑みを見せる彼は、改めて、ジルに頭を下げる。

「ありがとう」

「そんな！」

「ありがとう。俺や妻、そして他の仲間達の為に泣いてくれて」

ふと、風が強く二人に吹きつけた。辺りがざわざわと騒ぎだした。そして、男性の輪郭がおぼろ気なものになってきた。

「頼む」

その中、彼は必死に話す。

「こいつは根なし草だ。あっちへフラフラ、こっちへフラフラさ迷いやがる。しかし、もしお前の元に姿を現したら、その時はまた、こいつを受け入れてやってくれないか」

「はい」

「恩に着る」

男性が嬉しそうに眼を細めた。そして、何かを思い付いたように、服をあさる。

「何かの縁だ」

男性が何かを投げた。受け取ったジルは、しげしげとそれを見つめる。

古びた金貨だ。異国の文字が刻まれている。

「大したものじゃない。だが、一種のお守りにはなと思う。持つていてくれ」

ジルが頷いたのを見て、男性はジュンの額に、自分の額を合わせた。

「ごめんな。俺はお前とは会えない。会うべきじゃないんだ。だから、お前の分からないところで見てる。じゃあな」

それだけ言った彼は、本当に消えて逝ってしまった。

人を想う涙・5へ邂逅・2（後書き）

今回も短いですが、次回はちょっと長くなるかもです（汗

人を想う涙・6

「ジル！ さっさと起きろ！」

「ふえ？」

ジルが目を開けると、腰と頭に手をやる副団長が立っていた。

何故か自室のベッドで寝ている。そして頭が痛い。気持ちが悪い。紛れもない二日酔いだ。

「何ですか？」

何でもいいからとにかく寝かせろ、といった感情を悟ったのか、副団長の顔に意地の悪いものが見えた。

「へーえ？ まあオレは挨拶を済ませたからいいけどな。お前は命を助けてもらったり色々してもらったんじゃないのか？ ジュンだが、もう出発するらしいぞ」

ジルは一瞬で目が覚めた。飛び起きると全速力で部屋を飛び出す。息を切らした彼が門に向かうと、団長が必死で引き止めているところだった。

「どうして行かれるのですか！？ 暇なんでしょう、もう少しでも滞在していつては……」

「いや。他の国も旅してみたいしね」

へらりと笑った彼女は、ジルに気付く。

「ジュンさん、行ってしまうんですか！？」

「うん」

笑顔で頷いた顔が何とも憎らしい。

「ジル君、面白かったよ。また会ったときには正々堂々、いかさま無しでトランプゲームしよう」

また、という言葉に、胸があつくなった。

「もちろんです！」

もう会わないんじゃない。彼女とまた会えるんだ。否。

彼女の為にも僕自身の為にも、会うまで僕は生き続ける。

そんな心境に気付いたのか気付いていないのか、ジューンはロープをひるがえした。

「それじゃ」

言った彼女は口笛を吹く。突如馬が現れ、彼女はそれに飛び乗って去っていく。

華麗な容姿が見えなくなるまでずっと、ジルはその姿を凝視していた。

やがて、彼女は小さな点になった。大したことも考えず、ため息をついた。

「行ってしまった」

隣の団長も肩を落としている。

まさかこんなところで、この団長と気持ちを共感することになるとは思ってもいなかった。

ジルは改めて、彼女が何者なのか、不思議に思ったのだった。

「団長」

「呼んだか」

団長がこちらを見る。

ジルは一つだけ聞いてみた。

「団長は、ジューンさんとう知り合ったのですか？」

彼が溜め息をついた姿など、本当に久し振りである。

「昔、オレが帝都に詰めていたころ、事件があつてな。『師走の乱』と呼ばれているが、聞いたことはないか」

「聞いたことがあります！」

十二月、年末の準備に忙しい帝都の城に、どこから現れたのか、百人ほどの兵が襲いかかってきたのだ。あのとき、国王と当時従者だった団長の目覚ましい活躍で百人を撃退したと聞いたことがある。

「あれで団長は一気に出世したって……」

「そうだ。だが、実は、オレも陛下も、大した数は倒していない」「……え？」

「殆んどの兵を倒したのは、いきなり空から降ってきたあの人だ」

ジルは呆然となった。

気付いていないのか、団長は苦々しい調子を崩さず、そのまま話を続ける。

「オレ達が戦っている、上から悲鳴が降ってきてな。上を見上げると、ちょうど顔を強ばらせたあの人がオレの上に降ってくるところだった」

それは何とも気の毒な話である。

「え……ジュンさんは、どれくらい強いんでしょうか？」

「一騎当千。初めて人間にそういった気持ちを持ったよ。いや……」
団長がうつすらと目を細めた。

「あの人は人間ではないかもしれないな」

「

……………」

ジルは躊躇ちゆうちゆうしてから、昨日あったことを話し出した。

曰く、『宴会で聖なる土地の墓の人の話をされ、彼女が眠ってからその墓の人が現れ、少し自分と話してから消えた』と。

聞いた団長は、肩を竦めた。

「どんな男性だった？ オレが会ったのは、片腕が無い銀髪の男だったが」

「え……ええっ！？」

飛び上がったジルをよそに、団長は渋い顔で話す。

「あの人は気に入った人に、墓に眠る友人の話をすると聞く。昔、オレもお前のようにいかさまにはめられ、あの土地に行った。あの人を連れてな。そこでオレはその銀髪の男が眠る墓に花を手向けたらしい」

そっくりな体験をしたばかりのジルは、勢いよく話し出した。

「僕もです！ 僕は、錆色の長い紙を三つ編みにした男性と会いました」

「そうか」

頷いた団長は踵を返し、門をくぐる。

「あの幽霊は、長い役目も終わったから、ゆっくりひっそり眠れる

と言っていたが、あの人はそれが気に入らないらしいな。オレが聞いた話を、また別の奴に話してくれと言っていた」

ジルもあわててその後を追う。

「ジュンさんは、多分嫌だったのではないでしょう。昔何かを守るために戦った親友が、人に知られないまま朽ち果てていくのが」

団長の碧い瞳がはつきりと見開かれた。

「……そうかもしれないな」

門は二人を中に入れ、静かに閉まった。

団長はジルに向き直る。

「それはそうと、ローゼン第三席」

「はい」

「南の、ゴルザコフ共和国のまた向こう、クレアスチア国で祭りがあるのは知っているな？」

「はい。なんででしょうか？」

「それに行つて、密使^{みつし}と会つて、トレラ砦まで連れて帰つてこい」
ジルは思わず石ころにつまづいて、顔面から地面に突っ込んだ。

「オレ達の国は今、クレアスチアと友好関係を結んでいる。それでだ、向こうの国王に何やら困り事があると聞いた。堂々と人前では言えない話だから、密使を送るという。お前が、国境に一番近い砦であるここまで密使を連れてこい。そこからはオレが隠密に帝都まで連れていく」

「な、なななな……」

ジルが驚くのをよそに、団長はにやりと笑い、彼の肩を叩く。

「頼んだからな」

そのまま、団長は奥に行ってしまった。

「うわーっ！」

砦内に、ジルの叫びが響き渡った。

人を想う涙・6（後書き）

これでジル編は完結となります。

彼がまた物語に登場することはあるのでしょうか？

……まだ決めていないので、何とも言えませんが。

………まだ続きますからね！

忘れていった酒・1

ヒューイは首を竦める。

頭上を鎌が通過していった。

「あぶねえあぶねえ……っ」と

鎌を振るった張本人を短剣の柄で手早く気絶させ、茂みに隠れる。もちろん、大切な品を忘れることはない。茂みに手繰り寄せる。

彼はどこの国にも属さない、いわゆる『何でも屋』と呼ばれる組織に入っていた。その仕事の一環で、今は魔の森にいる。

危険とは聞いていたが、ここまで追手がかかるとは思ってもいなかった。一人で受けて正解だ。

そう胸を撫で下ろしたヒューイは、後ろから肩を叩かれ、それをうるさそうに払った。

「何だよ、ウォル。奴に仲間が集るかどうか確認しねえと……」

そこまで言うてから、そういえばと思い出した。

ヒューイが可愛がっている弟分は、別の仕事でクレアスチア国の帝都に出向いている。

恐る恐る振り返ると、カマキリをそのままの比率で大きくしたような化け物が、特大の鎌でこちらの首を狙っていた。

「うわおうええっ！」

奇声を発しながら飛び退くと、間一髪でそこに鎌が振り下ろされた。

さっき気絶させた追手を見ると、残念なことに、他のライオンのような化け物がその場にしゃがみこんでいる。かなり気の毒だが、追ってきたそちらが悪い。

再びヒューイが鎌の化け物を見ると、そいつは鎌を熱心に研いでいた。

もちろん彼はその鎌の切れ味を自分の首で試そうとは思わない。

よって、彼はさつさとずらからせてもらうことにした。

こっそり抜け出したヒューイは、自分が魔の森を抜け出したことに気付いた。

さらさらと草原の揺れる音が心地よい。空は雲一つなく、まさに最高の天気だ。

事前に叩き込んだ地図を頭の中で思い出す。そういえば『魔の森』の中心にぽっかりと空白があり、そこが『聖なる土地』だと聞いた覚えがある。

では、ここがその土地なのか。

ヒューイは草原の中央に何か白いものが見えた気がしたので、行くことにした。

それは墓地だった。真っ白の大理石で作られたそれらは等間隔に並んでおり、墓石にはこの大陸のものではない言語で何かが刻まれている。

何より、字が刻まれていようとなかろうと、それは荘厳な眺めだった。

ヒューイはしばし見とれてから、今回の依頼を思い出す。慌てて依頼人の仏頂面をした男性から受け取った花束を取り出した。会った際、金髪碧眼きんぱつへきがんなのだから、笑顔を見せれば美形に見えるだろうに、思ったのは内緒である。依頼人はどうやら騎士団の連中らしく、余計なことを言ったら斬られるかもしれないと感じたからである。

依頼内容は『聖なる土地にある墓の一つに、この花束を手向けてきてほしい』だ。

どれでもいいと聞いていたので、しばらくうろつくと周りを巡るやがて彼は、どの墓にも同じ花束が添えられていることに気付く。しかし一つだけ、小さな小さな、そして可愛い花が手向けられた墓を見つけた。

その隣の墓がかわいそうな気がして、ヒューイはそこに花束を手向けてやる。

そして一步下が^{もくとう}り黙禱。

風の勢いが弱まったように感じたのは気のせいか。

「……うし。依頼完了、っと」

やがて黙禱を止めたヒューイは、森を突っ切る準備を始める。

その首筋に、ぶつとい剣が添えられた。

「……あ」

「何しに来た？」

やけに静かな声。高さからして女性のようだ。そして、剣もかなり扱える剣士のようでもある。

嘘を話せば即座に斬る、そういった空気を放っていた。追手ではないようだ。

「……依頼を受けてた。ここの墓の一つに花束を手向けてくれてよ」

「へえ？」

女性の声音にひやりとしたものが混ざる。

「嘘だと思っんなら後ろを見るんだな。俺あ学がねえから名前は知らねえけどな。赤と白の花が綺麗だぜ」

ヒューイの話に、女性はためらってから剣を離し、本当に見に行つた。

こっそり振り返って彼女の背中を眺める。太陽のような金色の長髪に見とれてしまったのは、後生誰にも話さないだろう。

しばらくしてから女性は済まなそうな顔で戻ってきた。

そのままヒューイの前に正座し、頭を下げようとする。

「うおい！？ 何だよいきなり！」

「本当にごめん！ またどこかの冷やかしかと思ったんだ」

まじまじと女性を見つめた。

「それぐらい、いいってよ。頭下げんでも」

「でも、済まない……」

彼女に尻尾があったならば、しょぼんと垂れ下がっていたのかも
しれない。

やけに可愛い顔に、胸が動いた。

もしかしたら、これが運命の出会いってやつか？

それなら、自分がとる行動は一つだ。

「だからいいって。それよりあんたの名前は？ 金髪にこんなに綺麗な金色の瞳のセットは初めて見るんだけどな」

早速口説き落としにかかる。組織一の女たらしと呼ばれる所以だ。
ひやくせんれんま
百戦錬磨、敗けは一度もなかった。

なかったのだが、今回の相手はただ者ではなかった。

「俺？ ジュン・タチバナって言うんだ。元々旅人だし、遠くで生まれたんでね。ここらで見なくてもおかしくないと思う。父からは髪と瞳の色を、母からはこの顔をもらったんだ」

「さぞかしお袋さんはべっぴんだっただろうな。しかし、タチバナって名字もまた珍しいじゃねえか」

「旦那が東の最果て、日本生まれでね。俺もなんだけど」

ヒューイは倒れた。ジュンはいくばくの経験値をもらった。

「結婚済みかよ……！」

「え、何か悪かった？ てか何でいきなり倒れたのさ？」

ここまで首を傾げられると、冗談ではなく本当に心配されているのかもしれない。

「……何でもねえよ」

長々と溜め息をついたヒューイはまた体を起こし、ジュンと同じ目線になった。

「で？ なんであんたはここにいるんだ？」

「だからその旦那と、ダチの墓参り」

今度は前に倒れた。それから慌てて起き上がる。

「いや……ちよつと待て！ この墓地はここらに人が住む前からあったって話だぞ！」

「うん。今住んでる人たちが現れる前にここで大きな戦があつて、俺のダチはみんな、その戦で死んだんだ」

その言葉に詰まった。いくつか突っ込む点はあるが、今は突っ込

める空気じゃない。

みんな、って。それじゃあんだ、今一人なんじゃねえか。

ヒューイが思わずその言葉を飲み込んだとき、ジュンがふらりと立ち上がり、墓に向かった。慌ててあとを追う。

ジュンが立って見下ろしたのは、ヒューイが花束を手向けた墓だった。

「……まあ、こいつは何とか生き延びて、ばあちゃんになるまでしっかり生きたんだけどね」

腹立たしいらしく、荒い溜め息をついてから肩を竦めたジュンは、ヒューイの袖を引っ張った。

忘れていった酒・1（後書き）

新章です。

…これは新章と言っのだろうか？

忘れていった酒・2

「君、依頼終えたんでしょ？ これからどこに向かうの？」

「ああ、一応ギルドに戻らねえと」

「どこ？」

「きぎょうひみつ企業秘密だよ」

「どの国が一番近い？ そこまで送ったげるからさ」

「言われて、どう送るのか分からないまま、とりあえず答える。」

「ゴルザコフ共和国」

頷いたジュンは、いきなりヒューイに抱きついた。

「うぎゃあっ！？」

視界が胸で覆い隠される。

ヒューイは思わず目をつぶった。

何故か一瞬、辺りが無音になった、音が遠退いたような感覚がする。

と、ジュンが体を離れた。

「着いたよ」

「おまつ、何しやが……」

怒鳴ろうとしたヒューイの言葉が、そのまま途切れた。

二人は、ヒューイが見知った大通りの近く、裏路地に立っていた。

「ここでいいかな？」

済ました顔で言うジュンに、ヒューイは疑いの目を向ける。

「いいけどお前……じゅしや術者か？」

術者とは一般に、呪術、魔法、まほう魔法、祈禱、きとう祈禱、その他もろもろを職業にしている人間を一括して指す。

ジュンにはやりと笑った。

「違うよ。確かにチカラは持ってるけど、本業は戦士だ。傭兵稼業だよ」

「戦士たあまた、穏やかじゃねえな」

「どうも。どうせ生まれたときから、蝶よ花よと育てられたわけじゃないしね。九歳の時にはもう、並みの兵士なら手玉にとれたし」
そこは沈黙を守ろう。ヒューイはその間に冷や汗をぬぐった。

どうやら自分はトンデモナイ人間に出会ってしまったらしい。まず、人間かどうかすら定かではない。

「酒場、入らない？」

考えていたヒューイは、ジュンがふらりと酒場に入ったのを見て我に返り、慌ててあとに続いた。

「おい！」

周囲の視線を気にせず奥の席に腰を下ろしたジュンは、焦るヒューイを見てにやにやと笑いを浮かべる。

「何か？」

「何かじゃねえだろ！ 物騒だ！」
ぶっそつ

「大丈夫大丈夫。あ、ドリンクバー行ってくるね。ウェイター来たら、鳥の丸焼き一羽、頼んどいて。あ、ドリンクバーおかわりも」
「しっかり食うつもりだな！」

脱力したヒューイをよそに、ジュンはひらひらと野郎ヤロウの並ぶ列に入っていく。

ウェイターがあのだ、と恐る恐る声をかけてきた。

「ご注文は……」

「鳥の丸焼き一羽に豚の丸焼き一匹！ それからドリンクバー二人分！ あとカーラーの火酒とウエストの梅酒！」

「かしこまりました！」

怒声どせいに反応して飛び上がったウェイターに呆れたヒューイは、先ほどまでジュンが座っていた席に、誰か別の人間が座っていることに気付いた。

忘れていった酒・2（後書き）

読んで下さっている皆さん、ありがとうございます。

実は自分、某学校に通う学生なのですが……インフルエンザで学級閉鎖となりました…

せめてこの間だけでも毎日投稿を目指してがんばります！

忘れていった酒・3〈邂逅・1〉

「何だお前？」

「あまり気にしないでもらいたいな」

さらりと答えた人間は、見た目十四あたりに見える。声や適当に切られた短髪からして少年だろうか。

少年はウェイターが持ってきた酒類に顔をしかめた。一緒にコップも奪う。

「酒か。体に悪いぞ、ジュースにしろ。私も飲めない」

「人の飲み物を飲む気だったんかい！」

「あいにく酒には弱いのでな」

肩を竦めた少年は恐る恐る、と梅酒に手を伸ばした。

「……む。まあこれならいける」

「そうか。だったら俺の我慢^{ガマン}が切れる前に瓶持ってどっか消え失せろ」

「断る。この席が気に入った」

そう言った少年の顔は早くも赤い。

少年は左手で拳をつくり机の上に置くと、その上に自分の顎をのせ、じっとヒューイを見つめた。

「何だよ？」

「……奴のことが好きなのか？」

思わず吹きかけた。慌てて彼女を探すと、ジュンはドリンクバーの近くで男共と騒いでいる。

「な、ななななな」

「図星か。あの容姿だ、昔からよくモテていたからな。そのくせ本人は天然だ、何人の男が『ずっと親友だよ』の台詞を食らったことか」

「やっぱり天然かよ……」

「神譲りの唐変木がわざとなら、それはそれでタチが悪いが、私はそんな恐ろしいこと、信じたくない。まあ気付かないのもどうかと思うが」

確かに、その気持ちは分かる。

ヒューイは猛烈に頷きながら、ちびちびと酒に口をつける。少年はむっとした顔で酒をなめた。

「しかしあいつの天然は、未だに直っていないようだな」

その話し方に、違和感いわかんを覚える。

「未だに？」

「ああ。私は事情があつて、あいつとは面と向かつて会えない。理由は聞くなよ。下らないからな。話そうとしたり、淳じゅんと私を会わせようとしたら、即座に殺す」

「物騒だな！」

「どうせ私は物騒な奴さ」

膨れた少年が、空いている右手を振る。

風が凪いだかと思うと、ヒューイのコップがすっぱりと切断されていた。

まるで刃物で切ったかのような断面だが、少年はもちろん素手だ。

「……手妻か？」

「勿論。私の手に触ってみろ」

切られるんじゃないかと不安になったが、好奇心には勝てなかった。恐る恐る触れてみる。

すると、触れる前になにか別の細いものにあたった。

「なんじゃこら」

「細いワイヤーだ。ビーズを通すものであったり、バイオリンの弦であったり、種類は寄せ集めだがな。使い方によっては、先ほどやったようにものを切断することもできる」

少年は物騒な笑いを浮かべた。

「自分の首で試してみたいか？」

慌てて首を振った。そんな恐ろしい真似は嫌だ。

「だろうな。だったら諦めろ」

にやりとその物騒な笑いを収めた少年は、ウェ이터が運んできた豚の丸焼きに、ナイフを突き刺す。

そのままぐりぐりナイフをいじくり回す。

「しかし奴も頑固だ。私のことが言えるか。橘が死んでしばらく経つというのに、まだ再婚しないとは」

「おい……その言い方は亡くなったジユンのダンナに失礼じゃねえか」

「その旦那の遺書にあったんだ。俺のことはさっくり忘れろ、別の相手でも見つけてさっさと俺のときには行けなかった新婚旅行しんこんりょこうに行つてしまえ、ってな。そこだけざっくばらんに書かれていたのを覚えてる」

どう突っ込もうか悩んだが、ある一文に不信感を持った。

「俺のときには行けなかった？」

「ああ。奴は病氣持ちでな。一時マシになって外を出歩いた時期もあったが、大抵は中に、というより病院に籠っていた。何故かは知らんが、戦になれば一発で元氣になつていたがな」

ふんと鼻を鳴らす彼はナイフで豚肉を引きちぎり、それを食べる。

「む、うまい。そう考えれば、橘はかなり可哀想なやつだった。正

真正銘の人間だのに神様仏様かみさまほとけさまと祭り上げられ、天才てんさいやら神童しんどうやらと

崇められ、拳げ句の果てに暗殺だ。唯一、奴に華々しい時期があったとすれば、それは橘の病氣が回復して外を出歩いた数年と、淳との結婚から死ぬまでの間か。ふむ、そう考えれば奴の幸せは人生の半分もあつたのか。哀れとは言えんな」

「お、おい」

聞いていればかなり物騒な人生だ。

ヒューイはこの方、他人に拝まれたことなどない。子供のころも平凡の平凡、大人になってからもこの仕事はやって当たり前、とい

ったものである。それを拝まれるなど、想像するだけで鳥肌が立つ。しかも病弱とはまた寂しい。しかも最後は暗殺だと。

どこが哀れじゃないと言えるんだ。

「まあ、暗殺だとはいえ、奴はどうせ寿命がもうそこまで来ていた。持った方が奇跡と言うべきか」

「ひ、ひでえなあんだ」

「どうせ私は私だ。どうなるうと変わるわけでもない。ただ……」
少年の表情が沈んだ。

「それをいつまでもぐじぐじと引きずる馬鹿がウザいだけだ」

ヒューイの視界の隅で、ジュンがびくりと体を震わすのが見えた。しきりに辺りを見回している。可哀想だが、声はかけない。

よく見ると、少年は赤ら顔だ。かなり酔った様子。

「私に結婚しろなあ？ エラソーなこと言いやがって。だったらお前はさっさと再婚相手を見つけてるってんだ。俺は一回結婚したし、娘も孫もひ孫もいるからいいの、じゃないだろうがあのかすが」

怖い。ここまで酔っぱらいが怖いと思ったのは初めてだ。

しかし、聞き逃せないような単語が入っていたのも事実だった。

「孫？ ひ孫？」

「そうさ。奴が何年生きているか、知っているか？ 千年は越えているぞ、千年。人間に見えたか？」

言われるまでは、ちよくちよく非常識な場面を見ながらも人間だと信じていました。

「淳は真正正銘、一番偉い神の娘だ。あの姿からすると、二十歳から歳をとっているようには見えん。称号は……なんだったかな、そうだ」

少年はぼんと手をうつ。

「確か『幸神』だったな」

「コウシン？」

「渾名は大体何か一文字の後に神をつけたただけだ。私だと『死神』
橘だと『闘神』だな」

また三人とも凄いいだ名だ。そしてどちらも物騒だ。

「つまり、ジューンは幸せの神様と」

「ああ。民衆からはそう呼ばれていた。奴が生き物に幸せを運ぶと
思われていたからだろうがな」

少年の瓶にヒビが入り、そのまま砕けた。

「奴の苦勞も知らずに。笑わせる」

ぞっとするような声に、体が動かなくなった気がする。

酒場の空気が遠い。

忘れていった酒・3へ邂逅・2

ヒューイは遠い喧騒に顔を向けることはできなかった。

ただ、語る瞳を見つめる。

「奴がどれほど人間の為に身を粉にして働いたか知らないくせに、いるだけで幸せを呼ぶだと？ はっ、そんなやつが本当に実在するなら見てみたいわ。あいつは……あいつは……」

そこまで言った少年は、いきなり涙を流し始めた。本気で慌てる。泣き上戸なのか？

「おい、大丈夫か」

何があったかは知らねえが、という、次に口にしようとしていた言葉が消え失せた。

「あいつは……あいつはなあ……世界で一番幸せから遠かったんだ」

少年は泣きじやくりながら、なおも話し続ける。

「ガキの頃に親父のせいで働き始めて、次は母親と妹が自殺だ。危うく巻き込まれかけたのをあの人に助けられ、橘にも出会って、仕事もするようになったと思えば、その上司が暗殺だ。そしてその犯人らを倒し、橘と結婚して娘を産んだと思えば、今度はその橘が暗殺だ。その犯人と主犯格しゅはんかくをぶっ飛ばして、娘の結婚を見た次の日に上司が次々戦死だ。すっかり飄々ひょうひょうと生きていたあの人だって、あっさり逝ってしまった。唯一残っていたのは私と淳だけ。冗談じゃなかった」

必死に涙を拭っていた少年は、ヒューイの服をつかんだ。

「今じゃ私もあいつの側にいてやれない。頼む、本当にあいつは独ひとりなんだ。結婚しなくてもいい。あいつの側にいてくれ！」

絶叫に近い大声だった。酒場の人間がみんなこちらを向いていてもおかしくない。

少年の悲痛ひつうな心境が理解できたわけではない。ヒューイは何も言

えなかった。

「……俺はな。ただの人間のチンピラだ。ジュンとずっと一緒にいるなんて無理だ」

その言葉に少年はうなだれる。

「でもな。生きてるかぎり、そしてジュンが俺の近くにいるかぎり、俺は奴の味方であり続けるぜ」

「……それは少し無責任ではないか？ 近くにいろかぎりなど」

「うるせ。俺にだって生活はあるんδει」

言い返すと、少年はくすりと笑った。

何故か胸が跳ね上がった。

「……はれ？」

「何かあったか？」

「いや。大したことじゃねえと思う」

いや、本当は大したことだろう。ヒューイが同性にときめいたのは初めてだ。

そんなこと、ヒューイは話さない。

彼は立ち上がった。

「お前、瓶砕いちまったろ、代わりに下戸でも飲める酒を用意してやる」

「ありがとう」

ドリンクバーに向かう。赤玉と呼ばれる酒をコップに入れて席に戻ると。

少年は消えていた。

「……あり？」

砕かれた瓶も残っている。涙のあともある。しかし、肝心の少年がいない。

「おい？」

もちろん出てこない。

と、少年が座っていた場所に、紙が置かれていた。

『ありがとう。礼といっては何だが、金貨をやる。大したものでは

ないが、お守りにはなる。後生大事にとっておけ。もちろんこれも奴に言うなよ』

何とも質素な手紙だ。紙の下に古い金貨が出てきた。

「なんじゃこら。つうより、赤玉どうするんだよ？」

とりあえずヒューイが金貨をポケットに放り込んだとき、ジュンが戻ってきた。

戻ってきて、首を傾げる。

「あれ？ 君、今までどこにいた？」

「ちよつと前に赤玉取りに行ったが、それより前は、ずっと席に座っていたぜ」

ジュンはますます不思議な顔をした。

「俺、ずっとドリンクバーのあたりにいてたけど、君とすれ違っていないよ？ それにちらちら君の方見てたけど、いつの間にか消えてたじゃないか」

ヒューイは絶句した。

「……化かされたか？」

「はあ？」

テーブルを見ると、切断したコップが無い。先ほどまであった、砕かれた瓶も無い。

改めて、呆然とした。後ろからジュンにつつかれた。

「どうかした？」

「……………何でもない」

少年のことをバラしてやろうかとも思ったが、彼が何者か分らない以上、やめた方がいいだろう。

口をへの字にしたジュンは、赤玉を見て目を丸くした。

「まさか君、下戸^{げこ}？」

「んなわけねえだろ！」

ジュンは笑いながら席につく。

少年が座っていた席に。

「俺も下戸は見たことないけど、本当に酒があんまり飲めない奴っ

「ているんだよ」

「へえ」

まさか、さっきまであまり酒が飲めない奴と会談していたとは言えない。

「どんな奴なんだ？」

「かーわいいねえちゃん。ちょっと中性ばい顔立ちの。よく少年に見間違われた」

せつかなので赤玉を飲もうとしていた手を止めた。

先ほどの人物を思い出す。

私と言っていた。

おや？

「酒が大の苦手だね。無理矢理飲ますとすぐ酔って、泣き出して、そりやもう可愛かったんだよ。しかも酔っ払って武器のワイヤーで物切りまくるし」

確信した。あいつだ。

つまりヒューイは、同性にときめいたわけではなかったのだ。少し安心した。同時にあいつに同情した。

「そりやまた大変だな。え、そいつは今どうしてるんだ？」

そして彼が聞くと、ジューンはきよとした顔で見返した。

「何言ってるの？ さっき見たじゃないか」

まさか、会談を見られていたのか。

「……どういっつた？」

「だから、ほら。墓地」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「……はい？」

「君が手向けてくれた墓。あいつなら今、あそこに眠ってるよ」
「……………」

ヒューイはそのままぶっ倒れた。

忘れていった酒・4

しばらくうなされていたヒューイが目を覚ましたのは、もう夕暮れになる頃である。

ぼうつと辺りを見回した彼は、自分がどこかの部屋のベッドに寝かされていること、そして隣に、げんきよう元凶ともいえる彼女、椅子に座ったジュンがいることを確認した。

「……ジュン？」

「話しかけないで」

体を起こして見ると、ジュンはリンゴの皮剥きに必死になっている。彼女の足元には、切れずに繋がったリンゴの皮が、ベルトのように伸びていた。

「もうちよつとで終るからね」

「そうかい」

口を引き結ぶ彼女から視線を外し、窓から見える空を眺める。

「夕焼けが綺麗だな」

「うん」

「……話聞いてねえくせに、適当に相づちうつなや」

「いや。俺が相づちうつてあげなかったら、君、かなり寂しいヒトになつて……ぎゃあっ！」

悲鳴に慌ててそちらを見ると、ジュンの親指にリンゴの皮が絡まり、皮のベルトは見事にちぎれていた。

「ああああああ……」

「めいめいこ愁傷様」

落ち込んだジュンからリンゴと包丁を取り上げたヒューイは、その続きを始める。子供の頃は母の手伝いもよくしていた。無論リンゴの皮剥きもやったことがある。

黙々と作業を進める彼に、ジューンはやがてうめいていた声を止め、ヒューイをじっと見つめた。

しより、しよりという音だけが聞こえる。

「……なあ」

先に沈黙を破ったのはヒューイだった。

「その下戸、お前にとっては何者なんだよ」

ジューンはしばらく黙っていたが、やがて顔を歪ませ、口を開く。

「大切な親友だよ」

話して、彼女は顔を膝に埋めた。

ヒューイはまた黙り込む。ジューンも話し出さない。

ふと、風が窓から入り込んできた。

「俺の周りには生憎、死んだダチはいねえ。でも、時々怖くなるよ。こいつらがいなくなったらどうしようってな」

彼女はぴくりとも動かない。

「あいつらが死んだとき、俺はどんな態度をとるのか、自分でもわからねえ。生きた屍しかばねになるかもな。いや、鬼になるかもしれない。でもよ。絶対何があっても生き続けると思うぜ」

ジューンと下戸の少女が一緒にいた時間は、あまりにも長すぎたのだろう。

少女は知らず知らずのうちに、ジューンの魂の欠片と一緒にあの世へ持って行ってしまったのかもしれない。

しかし彼女は、ジューンに立ち直ってほしいと願っている。わざわざ幽霊になってまで来たのだから。

生きた人間が叶えてやらなくてどうする。

「あのな。俺はあのガキがめいいっぱい生きたのか、ポツクリ逝ったのかは知らねえ。でも、いい加減立ち直れ」

「なん……」

ジューンが怒ったように顔を上げた。

「今のお前じゃあ、そのダチは逝くに逝けねえだろうよ」

その顔に、動揺が浮かぶ。

「こんなフラフラしやがって。重りのない風船みてえだな。いつまで漂ってるつもりだ？ 人間が誰もいない世の中まで、ずーっとダラダラ生き続けるつもりかよ？」

「てめえ！」

ジュンが怒声をあげ、ヒューイの胸ぐらを掴んだ。

瞳の中で、金色の炎が燃えている。

悲しい燃え方だ。ふと、そう思った。

「……気が済むなら殴りゃあいい。殺せばいいさ。でも、そんなことしたって、誰もお前の手綱をとろうなんて考えねえよ」

「……………」

「いつまでウジウジしてるつもりだ。そりゃ、風船みたいに生きるのもありだぜ。でも、だからってこの世の不幸を一身に背負ってますーみてえな顔はすんな」

ジュンが呆然とする。胸ぐらを離れた。

「そいつらは死んだかもしれないねえ。でもお前は生きてる。だったら生きる。いい加減、墓の周りでグググジしてんな。俺はそいつらが何を守りたくて戦ったのかは知らねえが、お前は知ってんだろ？」

だったら、それがどうなるのか、どうなったのか、しっかり見届けに行けよ」

ジュンが、はっとした顔でヒューイを見た。ヒューイも見返す。

ジュンの顔に彩られた驚きは、不意に涙という形で溢れだした。

彼女は嗚咽を漏らし、そのまましゃがみこむ。

小さい声が大きなものになるのには、さほど時間はかからなかった。

ヒューイはただ、赤い夕焼け空を眺める。

しばらくして、ジュンは落ち着きを取り戻した。

ぐずぐずと鼻をすすする音が聞こえ、それから涙声が聞こえる。

「ごめん」

「いいってことよ」

ジュンにこれ以上、あの少女の話をさせる気はない。

だが、いつか、こうだったなあとジュンが泣かずに話せる、その時が来てほしい。

リンゴを適当に切り分け、その一つを彼女の口に押し込んだ。

「む？」

「食え」

「む」

そのまま手を使わずに口だけで食べる様子は、まるで子供だ。思わず呆れた。これで千年も生きているとは思えない。

「……ガキ」

「うっさい」

食べ終わったジュンの手がリンゴに伸びる。掴んだそれを、彼女はヒューイの口に突っ込んだ。

「……おい」

「お返し」

あっさりそれだけを言った彼女は、ふらりと立ち上がり、ロープを羽織ると部屋の扉を開いた。

「じゃあね」

そのまま出て行こうとするジュンに、ヒューイは声をかける。

「また気が向いたら来いよ。今度は本気で口説いてやっからな。酒もおこつてやる」

彼女は振り返らなかった。ただ、一瞬、体の動作を止める。

「……うん」

「またな」

ジュンは扉を閉めた。

彼女の背中が見えなくなった。

ヒューイは眼を瞑り、耳をすませる。

ジュンが遠ざかっていく音を聞いていた。

やがてそれが聞こえなくなると、ヒューイはリンゴを口に放り込む。

「……夢みてえだ。どいつもこいつもふらりと消えやがって」
それに応える声はない。

だが、誰かの忍び笑いが聞こえた気がした。若くて幼い、男なのか女なのかよくわからない声。

「笑うなよ」

金貨を取り出す。

しみのついた金貨は、太陽の光を浴びて鈍く輝いた。

「さて……これからどうすっかな」

そう呟いてみるも、もう答えは決まっている。

とりあえず、日常に戻ろうと思った。

「いや、違えな」

幽霊に遭ったことも仙人と遭ったことも全て、ただ鮮やかに彩られた、日常の延長線なのだ。

だからいつの日か、またいつかの日常で遭えるかもしれない。

そのために、それまでくだらない日々を過ごしておこうと決めた。
「ウォルの顔でも見に行くか。んでついでにその祭りを見物していくと」

ここ数日の予定を決め、リンゴをくわえたヒューイだった。

忘れていった酒・4（後書き）

これでヒューイ編は完結となります。

次で、ある意味最終章なのかな？

予告をしておきますと。

ヒューイの弟分が登場します。

……それだけ！？ ええ、そうですとも！

もちろん話はそれだけじゃありませんから！

解かれた問題・1

ジョエルは息を呑んだ。

道に迷ったのだ。こともあろうに、魔の森で。

とりあえず木に登って息を止め、下から来る魔物たちをやり過ごす。

魔物が通りすぎるのを見てから、そろそろと下に降り、馬車を探した。しかしない。

自分の軽率さを呪った。この分ではあの『何でも屋』の少年の命も危ない。

ウォルと名乗った可愛らしい、黒髪の少年の顔を思い浮かべる。

しかし声を張り上げることもできない。

「くそ……」

他国にまで名の響く敏腕宰相びんわんさいしやうらしからぬ声を漏らしてから、肩を落とす。

ジョエルはクレアスチア国の宰相である。

数日前、北の土地の領主の背信行為はいしんぎゆうゐが発覚した。下手をすれば戦争になりかねない。

国王と内密に相談し、下には漏らしていないが、早くこの案件をどうにかしなければいけない。

そう思い、戦争をするかもしれないゴルザコフ国のまた向こうにある北の国に、ジョエル自ら密使として向かうことにした。

何でも屋には、その北国の最南端、勇猛果敢ゆうもつかかんで知られるトレラ砦から来る騎士との渡りをつけてほしいと依頼してある。そしてその何でも屋の少年がわざわざ、どの辺りで落ち合いたいのかを聞きにきたのだ。

うろつろと歩き回っていると、ジョエルは洞穴を見つけた。

休もうと足を運ぶ。

その腕を誰かが掴んだ。

「……はい？」

表情が動かなかったのは、仕事のたまものだと自分をほめてやりたい。

振り返ろうか。いやしかし振り返って魔物だったらどうする。いつそ振り切って、万に一つの可能性にかけてみるか。

高速で頭を働かせるジョエルをよそに、背後の人物は口を開いた。
「あなたがジョエル君かしら？」

「はい？」

ジョエルは振り返り、まず安心した。

普通の、どこにでもいそうな亜麻色の髪の女性だった。白いコートのような服に首を傾げるが、大して気にならない。
胸を撫で下ろしたジョエルは答えようとしてから、口を閉じた。
いや、しばし待て。

なぜ『普通』の『女性』がこんな危ない魔の森にいる。

「……あなたは？」

「通りすがりなのだけど、森の中で迷う坊やと馬車の従者を見かけたの。聞けば、ジョエルと言う男性とはぐれたと」

「ウォル君と出会ったのですか！」

思わず顔を明るくしたジョエルに、女性は笑いを見せた。

「連れていきましようか」

「お願いします」

女性に手を引かれ、森を出る。

草原を見て、ここが『聖なる土地』だと思い出す。

ジョエルは、岩に座る少年と側の馬車を見つけた。

「ウォル君！」

「ジョエルさん!!」

飛び上がった少年が駆け寄ってくる。

「済みません！ お怪我はありませんか！？」

「大丈夫ですよ。君こそ大丈夫かい？」

「はい。こちらの方に助けてもらって」

見ると、女性^{きよ}は森に向かうところだった。

あわてて引き留める。

「ありがとうございます。自分、クレアスチアのジョエルと……」

「名前は名乗れないの」

やんわりとした拒絶^{きよぜつ}に詰まる。

「……では、何かお礼でもさせて下さい」

「私にしないでいいから、向こうの墓地に花でもあげなさい。迷わなくて済んだのは、あれのおかげなのだから」

それだけを言った彼女は、森に入ってしまった。

「……………」

少年と顔を見合わせたジョエルは、彼の手にある花に気付く。

「……これは？」

「森の中で、綺麗だと思ってとった花です。墓地に添えたいんですけど……………」

「待ってください、私もとってきます」

慌てて探すジョエルに、少年はぽつりと呟いた。

「とても一国の宰相には見えません」

「見える必要ありません」

言い返した彼は花を集める。

二人で墓地に向かい、思わず唸った。

墓石の数が多すぎる。

妥協して、二人で同じ墓に手向けることにした。

全ての墓に花束が置かれている。それに加え、最前列の墓に小さな花が、その隣の墓に花束が置かれている。

二人はその後ろの墓に手向けた。

黙祷する。

彼らはどのように生きたのだろうか。

ふと思ったジョエルが黙禱をやめると、後ろに人が立つ気配がした。

「おや」

振り返ると、先ほどの女性とはまた違う、金髪の女性が立っている。

女性は口笛をふいた。

「ここんどこ、客が多いねえ」

「……何者ですか？」

「そっちこそ」

からかうように返した女性は、黙禱を終えた少年を見つめた。

「これから、君たちはどこに向かうんだい？　あまり見たことないペアだけど、親子？」

「母国に戻るところです。ちなみに彼とは仕事の関係で行動を共にしています」

「へえ。母国つてのはどこなんだい？」

「クレアスチアですが」

「祭りがあるんだっけ」

女性はにっと笑った。

「俺も一緒に、していいかな？」

ジョンと名乗った女性は、旅人だという。

「色んなところをふらふら巡り歩いてるだけなんだけどね」

そう言って笑った彼女は、歩きながら後ろを向き、ジョエルと少年を見た。

「で？　どうして君たちは墓に花を手向けてくれたのかな？」

「どうして、と言われても……」

言葉を濁したジョエルに代わり、少年が胸を張って答えた。

「お礼です！」

「お礼？」

ジョンが目丸くする。

しかし長年外交官を兼任してきたジョエルには、彼女が驚いたよ

うには見えない。

ただ、彼女の瞳が探るように少年を見ていることだけは、気になった。

「どうしてお礼を？ あの墓地の人々は皆、戦で千年前に亡くなっているよ」

「それは、あの……」

「我々がはぐれていたところを女性に助けていただきまして。その彼女が、私ではなく墓にお礼をと」

戸惑った少年の続きをジョエルが話すと、ジュンの眉が寄った。

「おかしな人だね。その女性はどんな服装だったんだい？ 特徴は？」

「白衣を着た、亜麻色の髪的女性でした」

ジュンが瞳をいきなり和ませる。

「……そっか」

納得したらしい彼女は前を向いて歩き始める。ジョエルは思わず少年と顔を見合わせた。

城に着くと、逃げた従者が報告に来ていたらしく、てんやわんやの大騒ぎとなった。

解かれた問題・2

国王の前に出ると、彼は慌てたようにジョエルに近づき、半泣きのまま大丈夫かと声をかけた。その声が一転、潜めた声に変わる。

「……魔の森で、魔物に見せかけた追手おってにやられたと聞いた。服装や体格は？」

ジョエルも声を潜めて応じる。

「やはり、あの国の者でした」

「そうか」

ため息をついた国王は声の大きさを元に戻し、後ろに控えていた少年とジュンに声をかけた。

「後ろの二人にも迷惑をかけてしまったな」

「い、いえ、そんな！」

飛び上がった少年をよそに、ジュンはにこにこ首を振る。

「私も祭りを見るため国に来る途中でしたので、迷惑などは全く」

「では二人とも、お礼を兼ねて祭りが終わるまで城にいてくれないか？」

少年がまるで機械のようにぶんぶんと首を振った。

「ももも申し訳ありませんが、ぼ、ボクはお断りします！ 仕事がありますので！」

そう言った少年が慌てて謁見えっけんの間を飛び出すと同時に、国王はジュンの腕を掴む。

「あなたは どうする？ 先ほどの少年のような仕事は持っておられないようだが……」

ジュンは肩を竦めた。国王の視線に負けたようだ。

「……あまり城のような堅苦しい場所カタいにいるのは気が進みませんが、いいでしょう。城にいます」

その言い方が無礼だったのは言うまでもない。

しばらくして、仕事が終わったジョエルは、ジュンのあてがわれた離宮^{りきゅう}に顔を出した。

小間使いに案内されると、ジュンはソファーに寝そべり、ぐったりとした様子でこちらを睨^{にら}んでいた。床に豪華なドレスが脱ぎ捨ててある。

「……だから城にいるのは嫌だったんだ」
ぼやきをジョエルは無視する。

コロンの香りが酷く鼻につく。どうやら離宮には先ほどまで大勢の客がいたらしい。

「陛下は好意で申し出られただけです。それを未来の王妃になるかもしれないとどこぞの貴族が勘違いしてやっているのですから、陛下を恨まれるのは筋違^{すじちが}いですよ」

「へいへい」

適当な返事をした彼女は、じっとジョエルを見つめた。

「……で？ 今度戦争をおっ始めるのは、クレアスチアの北にあるあの国かな？」

出された茶を飲もうと手を伸ばしていたジョエルは、思わず手を止める。

「將軍サンの奥さんが、オレが王妃にふさわしいのか見に来てね。
^{ぶあいそう}無愛想な真似はしちやいないけど、その分しっかり情報は引き出させてもらったよ」

「……どうするおつもりで？」

「別に何も」

その答えに、ジョエルは彼女の瞳を見つめた。

「ただ、戦争に巻き込まれるのはイヤだから、ちよいとこの辺りからは退散しようかなと思ったただけだ」

「そうですか」

内心安堵した彼に、しかしジュンはさりげなく追撃をかける。

「ってことは、本当にケンカ、やるんだ？」

「どうでしょうね。陛下にその気はありませんが、向こうが。みすみす土地を取られるつもりはありませんから……って喧嘩ケンカ!? 喧嘩と受け取るんですか!」

「それで、あの坊やに仕事として、そのまた向こうの北国の騎士団とのお話を依頼したのか」

「ジュンが突っ込みに無視して続けた言葉に、自然に彼の眉が寄った。」

「ジョエルは將軍にそこまで話してはいない。国王と彼だけで行った独断だ。」

「よって、將軍の奥方から引き出せるものではない。」

「改めて、妙齡の女性を睨んだ。」

「貴女は何者です」

「さてね」

「しかし、それはオレも聞きたいところだ」

へらりと笑ったジュンの後ろの窓に、大柄な影が足をかける。

黒髪をばつさり切った国王だ。

毎度ジョエルが額を押さえ抗議しているのだが、いつこうにやめる気配はない。

ジュンが後ろに立つ彼に、やや呆れた声で応じた。

「君のせいでコロンの二オイが染み付いちゃったんだけど、どうするつもり?」

「別の服を仕立したてるまでです。それにまさかあなたがドレスを着てくださると思ってもいなかった」

ジュンのため口にくくじらを立て、さすがに指摘させてもらおうとしたジョエルだが、国王の敬語に思わず飛び上がった。

「あなた方……まさかお知り合いで!？」

「一度、会ったことがある。先ほど話題に出た騎士団、トレラ砦でな」

頷いたジュンが紅茶に手をつける。

「そついや、数日前に会ったんだけど、カリ君があそこの団長に出世してたよ」

「ほう？　また懐かしい名を聞くものです。団長になっていたとは吉報だ」
きつほう

「正直、君達にもう会うつつもりはなかったんだけどね」

「それは手厳しい」

苦笑する国王も、滅多に見られるものではない。

「それに先ほどジョエルが言っていた王妃うんぬんの話だが、オレとしては是非貴女を王妃にしたい。ぜひあなたしかしそんなことを申し出せば……首が飛ぶ」

「おうおう、よく分かってんじゃないのさ」

会話の内容にめまいを覚えたジョエルだったが、長年の努力の結晶により、それを踏ん張った。

そんな彼の葛藤をよそに、固まった小間使いに茶を要求し床に座った国王は、体を起こしたジュンに向かって笑いかける。

「それで？　貴女からすれば笑止千万だとは思うが、北の領主の裏切りは確実だ。いきなり向こうの国と共に旗を翻して襲ってきてもおかしくない。ならばあちらと連絡をとって背後を突けるようにしておく方が効果的だ」

「ま、それもありかね。でも君、気付いてる？　まだその北の領主クンたちは、人質のように彼らの奥方や娘をこの城に置いているよ？　そして俺に接触させてきた」

詰まった国王をよそに、ジュンはにやりと笑った。

「ま、何にしる向こうが突っかって来る前に防御の盾は揃えておきな。なんならあの国の兵隊全部、蹴散らしてあげようか？」
けち

ぶっ飛んだジョエルをよそに、国王は目を丸くしてから膝を打つ。
「名案だ！　貴女なら身元がばれる心配もない。是非今からでも」
「いやいや、今俺が城を離れるのは止めておいた方がいいね」
さらりと言った彼女に、ジョエルは嫌な予感を感じた。

解かれた問題・3

「何か起きるのですか？」

「師走の乱を覚えているかい？ 間違はなく、あれとそっくりそのまま、同じ出来事がこの城に起きる。小規模しょうきぼなのが救いだけど」

国王の顔が蒼白になった。自分の顔もそうなっていると自覚しつつ、ジョエルは言いつのる。

「どうしてそう思われるのですか？」

「貴族でも何でも俺が離宮りきゆうに招待され、王妃候補と目される。それが気に食わないと思う諸侯しよこうもいるだろうさ。そいつらと、日頃から君の政治を快く思わない奴らが結託したら、どうだい？」

うつすらと笑ったジュンにジョエルは背筋を震わせた。

目の前にいるのはただの女性だというのに、この威圧感は何だ。

国王が口を開いた。

「狙われるのはオレとジュン殿だな。襲撃は夜だろう。なら、オレは今夜から、この離宮に泊まるとするか」

ジョエルは国王をしばきたい気持ちに駆られた。しかしそこはぐつとこらえ、代わりに将軍がよくやる雷を落とす。

「どうしてそうあっさり決めますか！！ 警備を増やして、ジュンさんを城に入れればいいでしょう！」

「俺がイヤなんだよ」

ジュンの言葉に、ジョエルは即席そくせきでハリセンを作りたい気持ちを抱いたが、即座に押し殺す。

彼の気持ちに気付いているのかいないのか、ジュンは続けた。もし気付いていないのならば、それはもう一種の才能だ。

「だってさ、俺が力を奮ったら、警備の人まで殺しそうだし。だったら守る人間は一人の方がいい」

言い種にジョエルは突っ伏した。国王が苦笑ぎみに言いたいこと

を引き取る。

「オレももう、一国の王です。腕に自信はあります。それでもあなたはオレを会った当時の十歳の若造のように扱いますか？」

十歳の若造？

ジョエルは顔を上げた。

見た目が二十歳前後、多くて二十三ほどに見える彼女は、へらりと笑って国王の肩を落とさせた。

「俺から見れば、誰も彼もが若造さ」

「さいですか」

額を押さえ溜め息を吐いた国王は立ち上がり、寝室に上がる、と言ってきた。

襲撃があつたのは、意外にも翌日の昼間だった。

国王が姿を現し、その場にいたジョエルと三人でお茶会をしていたときのことである。

息を切らして駆け込んできた国王の従者の背中に剣が突き刺さりかけ、それをジュンが当て身でかばう。ちなみに剣は彼女がすいと掴み取ってしまった。

側転そくてんでもするように体を回転させたジュンは、手首のひねりだけで跳躍ちやうやくし、入り口に現れた物騒な人間たちの目の前に降り立つ。

額にかかった美麗な金髪を指で払った彼女は、にこりと笑った。

「君達は俺と国王、ジョエル君のうち、誰を殺したいんだい？」

「願わくは三人共だな！」

怒鳴った一人が剣を抜くが、ジュンの足蹴で壁に叩きつけられ伸びる。

その隙にジョエルは小間使いと共に壁際まで下がっていた。彼は自分が戦力になれないのを自覚している。

「それでも何か腹立つなあ！」

ジュンからの罵声はのせは、しっかり受け止めておこつ。

国王が剣を抜き、窓から飛び込んできた襲撃者を斬り伏せる。ジ

ユンは相変わらず入口から入ってくる者達を斬り捨てる。

気が付けば、二人は肩をすくめ、剣を収めて向かい合っていた。

「何人殺った？」

「オレは二十人」

「あ、惜しい。十九人だよ。でもさ……」

ジューンはちらりと床に伸びる、初めに足蹴にして気絶させた男を見る。

「あいつを殺れば、同じになるよね……？」

「いやいや待て待て」

何とも物騒な話である。

ジューンも冗談だったようで、舌を出してから男を足で踏みにじって起こした。

「おい、クソガキ」

「ひ……ひいつ！？」

がらりと口調の変わったジューンに怯えたらしい彼が、正座で彼女を見つめる。

「てめえの親玉はどこだ？」

「そ、そんなもん言うかよ」

その言葉にジューンが無言で腰の剣に手をやる。見た男が叫んだ。

「し、知らねえ！ 本当に知らねえんだ！ 頼む、見逃してくれ！」

ジューンは国王と顔を見合わせた。

「見逃してって言われてもねえ……どうする？」

「まあ……逃してもよいのではないか？」

国王の言葉に、思わずジョエルは脱力し座り込む。

「望んでやったことでもないようだ。なら再犯の可能性も低いだろう。また来ても殺すだけだ」

その言い草に、ジョエルは頭痛を覚えたのだった。

事後処理を終えたジョエルの元に、ジューンがやってきた。

「貧弱ひんじやくだったねー」

からからと笑ったジューンにジョエルは額を押さえる。

「それでもひやりとしましたよ……」

「あはは、心配してくれてたんだ。ありがとう」

夕焼けの中、ジューンは酒をあおる。

ジョエルは銘柄めいからに目を止め、眉を潜めた。

「……カラーの火酒？」

「そ」

彼女の笑みが恐ろしい。

「もしかして、俺を疑う？」

カラーと名のつく土地は、たった一つ、クレアスチアの北の国にしかない。

ジョエルはしばらく彼女を見つめてから、首を振った。

「……いえ」

「偉い偉い」

とたんに、彼の頭にジューンの手が乗った。

「大丈夫、単に知り合いのいる組織がカラーの近くにあっただけだから。送り届けたついでに買ったただだし」

内心胸を撫で下ろしたジョエルは、ガラスのコップに酒をついでもらい、それに口をつける。

ジューンはジョエルが顔色を変えないのを見て、低く口笛を吹いた。

「お酒、強いんだねえ」

「たしなむ程度には。あなたも相当強そうですが」

「そりゃ、これぐらいなら楽々一晩は飲み続けられるよ」

誇張が全く入っていないと分かる口調に、思わず脱力する。

もう突っ込む気力も残っていなかったので、ジョエルは黙々と酒を運んだ。

夕焼けの空が暗くなっていく。

沈黙を破ったのは、ジューンだった。

解かれた問題・4

沈黙を破ったのは、ジュンだった。

「君と坊やが初めに会ったあの女性ね、実は幽霊だったりする」
思わず吹きかけたが、ぐっところえて飲み干した。

「……あの、聖なる土地の？」

「そ。もう少し言うなら、君達二人が手向けたあの墓の方」
無言で続きを促す。

ジュンは軽い調子のまま、あつさりと口を開いた。
「絶対神様だったんだよね。俺はあの人の側で二十年もの間成長したけど、あの人はずっと、成人の姿から変化してなかったし。それにカツコいい獣に変身できるし」

見た目成人前後にしか見えない彼女に、どこから突っ込もうか考えていると、ジュンがまあ、と言葉を続ける。

「でもまあ、死んじやったら意味ないか」

思わず、言葉を呑み込んだ。

「あの人が亡くなったときは、もう悪夢でも見てんのかと思ったんだけどね。現実だと確認したときは、もう怖かったのなんの。真つ暗な宇宙に放り出された感じ。道標みちしるべだったあの人がいなくなつて、狂乱しちゃったしね」

コップを置いた彼女は、ぼんやりと両手を眺める。

「で、気が付いたら辺り一面血の海。手にもべったり血とか浸いてたりして。止めてくれたのはダチだったんだけど、あいつにも、あの人の遺書にも、旦那の遺書にも救われたなあ」

「……それは」

ジョエルは何も言うことができなかった。ただ、強烈きつれつで、壮絶じゆうぜつで、哀かなしかった。

そして彼には、ジュンは話したがっているように思えたから、口

を開けた。

「……その二人の遺書には、何と？」

「旦那のには、俺達を守りたかった世界がどうなったのか、しっかりと見届けてからこつちに来い、って書いてあった。あいつらしい堅苦しい文面だったよ。で、あの人のには」

ジュンはコップの酒を飲み干した。

「私の娘がどんな人生を辿るのか、その子孫やあなた自身の孫たちの人生を見届けるぐらいの意気込みで生きなさい、って書いてあった。さっぱりさつくり書かれてたよ」

「それで？ その方のご息女は……」

「ちよつと前に息を引き取った。寿命でね。孫やひ孫に囲まれて、羨ましいぐらい、幸せな人生だったよ。ちなみにそのひ孫ちゃんはこの大陸の中央で王妃をやっていたりする」

ジョエルは酒に口をつけてから、ジュンを見つめた。

「おうひ……王妃！？」

「知らない？ 最近結婚した、闘神とうしんの娘って言われてた子」

「え……ではまさか、あの姫將軍ひめしょうぐん！？」

「ご名答。それからジョエル君、落ち着いて座ろうね」

言われてジョエルは、初めて自分が立ち上がったと気付いた。座りながら話す。

「それはまた……大出世ですね」

「でしょ？ でもあの子は正直王妃の地位なんて、どうでもいいらしい」

「では何故王妃に？」

「国王が誰か王妃を迎え入れなきゃならなくて、困っていたから。だったら自分みたいな、他の国の影響を受けない娘を王妃にすればいいだろう、ってね」

思わず机に突っ伏した。

「すみません、どう突っ込めばいいのかわかりません。ただ……ごめんなさい呆れてものが言えません」

「その気持ち、かなり分かるよ。でもね」

親身になって肩を叩かれた。

しかし、体を起こすと、ジュンの瞳が少し潤んでいた。

「王妃になれば、必ず子供を生まなきゃなくなる。そしてその子が次の国王になる。つまり、あの人の血は薄くなりこそすれ、決して絶えることはない。安心したんだ」

ジュンは仙人なのかもしれない。

ジョエルはふと、そんなことを思った。

彼女は過去の追憶^{ついで}にひたり、今を見つめながら同時に未来も、時には過去の姿も重ねて見ているのかもしれない。

「そのひ孫ちゃんに一度会いに行っただけど、本当に性根があの人にそっくりでさ。ああ、やっぱりあの人の魂は根付いてるんだなって痛感したんだ」

ジュンの瞳に、あの亜麻色の髪の女性との日々が映っているのだろつ。

「俺には見えないけど、あの人があの子達を見守っていてくれる。そう思えただけで充分さ」

知らず、ジョエルは頭を机に乗せていた。ジュンがからかうように、彼の額をつつく。

「あれ？ さすがに酔ったかな？」

酔ってなんかいません。

そう言いたいのに、口が動かない。

やがてまぶたが重たくなって、ジョエルは目を閉じてしまった。

解かれた問題・4（後書き）

全く関係がないのですが、

今夜の真夜中から明日の朝方にかけて、しし座流星群があるらしいのです。

一番流星の数が多くなるのは6時過ぎなので明るくなって見えませんが、5時ごろならまだ見えるらしく。

早起きな方はぜひ空を眺めて下さい！

以上、天体観測をしようとして失敗した学生からでした……

解かれた問題・5 〈邂逅〉

風が心地よい。

しばらくしてジョエルが瞳を開くと、そこは彼の寝室だった。体を起こすと、窓のカーテンに目をやる。

そこに、亜麻色あまいろの髪あまいろの女性が、髪をなびかせながら立っていた。

「あなたは……」

「誰かしらね」

歌うように聞き返した女性は、すいと彼の近くに歩み寄る。

ジョエルは知らず知らずのうちに、口を開いていた。

「聞きましたよ……あなたのこと。ジュンさんはかなり戸惑とまどったようでした。神様なのに、何で亡くなったりしたのですか」

「そうねえ……どうしてかしら。私が生きているより、あの子が生きていた方が色んなことが起きるんじゃないかと思ったから、かもしれないわね」

何を言っているのか、よくわからない。

首を傾かしげたジョエルに笑みを向けた女性は、まるで歌手のように高らかに、歌う。

「次の千年の人間たちに、誰にもわからない謎を残そう。何故なぜ生き物は歳をとり、死ぬのか？ 生き物にどうして寿命があるのか？

我々が解けなかった謎を、次の世代に伝えていこう」

「それは……」

ジョエルは答えを言いかけてから、女性の顔を見て、膨れたように言い直した。

「あなたなりの答えが出ているようではないですか。我々が解けなかった、のは嘘ですよね」

「いえ？ 本当よ。この答えも、死んでからあちらで考えたもの」
くすりと笑った彼女は、両手を広げ、不思議な笑みをたたえた顔

のまま、ジョエルを見つめる。

「もし、寿命が無かったらどうする？ さすれば人間は皆、できるだけ長くなが生きようとするわ。そしてその永い時間に、やがて飲み込まれてしまう。そうなったら、彼らはどうする？」

「……分かりません」

「あのね」

女性はぐつと顔を近づけ、吐息がかかるほどの至近距離でジョエルに囁いた。

「命つてのが短いから、人間はその短い命を必死こいて生きるのよ。それに、だからこそ命を大切にする。逆に命が永かった場合はどうなるのかしら？ 決まっている。人間は必死にならないし、命をお粗末そまつに浪費してしまうわ」

「それはまた……」

いきなり暴論をぶちまけられ、まだ完璧に理解しきれていなかったが、ジョエルはとりあえず思ったことを言ってみた。

「極論きょろんですね」

「ええそうよ。でも、実際に人間は、短い命が散るまで、すごく必死に生きるじゃない。そうやって生きたら、後々後悔あとあとこうかいしないのよ。今の私みたいだね」

思わず女性を見た。ジョエルは、テラスから外に出て、月の光を浴びて輝く女性かがやを目に焼き付けた。

「……後悔していいのですか？」

「ええ」

「全く？」

「全く」

「貴方あなたを失ったときのジュンさんの悲しみは？」

「あんなに悲しんでくれるなんて、思ってもいなかったわ
ぬけぬけとよく言う。」

ジョエルはその言葉をかろうじて口の中で押し殺した。
代わりに、聞いたかったことを口に出す。

「……もつと、生きたくはなかったのですか？」

女性がじつと彼を見つめた。

「生きられるのであれば、どこまでも生きていたかったわ。でも、もうこれで十分。十分、私は私の時を生きた」

どこまでもさっぱりとしていた彼女は、呆氣にとられたジョエルに口元をゆるめる。

「あなたがそんな顔しないの」

「でも……」

自分でもどんな顔をしているのか、ジョエルには全く見当もつかない。

しかし、涙腺が崩壊しそうだとはいっていた。

気付いていないのか、故意に無視しているのか。恐らく後者だろう女性は、嬉しそうにテラスによじのぼった。

そこで大の字になって、風を受け止める。

彼女の亜麻色の髪が、炎のように鮮やかに揺らめいた。

白衣が揺らいだ。

気持ち良さそうに風を感じた女性は、くるりと回って、ジョエルを見下ろす。

「人間にも生き物にも、いずれ死ななければならぬ時が来るの。」

だったら精一杯生きないと。生きて、その思い出を遺していくのよ。遺して、次に受け継いでいく。淳が私達の墓を今の時代まで残したように。私が娘を産み、その娘が孫を、そしてこの血がひ孫まで受け継がれているように」

いたずらっ子のような顔でジョエルを見た彼女は、その錆色の髪を嬉しそうに撫でた。

「お分かりかしら、ジョエル・タチバナ君？ あなたなら何となく分かるはずよ」

ジョエルは金色の瞳をそらし、あえて問われていないだろうことを呟く。

「……つまり、誰かと結婚して子を成せと」

「かなり省略すれば、そういう意味合いにもとれるわね」
くすくすと笑った女性は、頭を撫でていた手を離し、一步下がった。

彼女の背後に、日の欠片が見えはじめている。

「最後に少し、言わせてもらおうかしら」

テラスの手すりの上で、女性は高らかに宣言した。

「人生は決して永くなく、つまらなくない！ だから、その時がくるまでがむしやりに生きなさい！ そして」

女性は手すりの上で、また一步後ろに下がった。下がって、姿が消えた。

「あなた達に幸あれ！」

ジョエルは慌ててテラスに駆け寄り、下を覗き込む。

その時だった。

疾風^{かせ}が下から空へ吹き上げる。ジョエルが空を見るが、何もない。下の森から、低く獣が唸る音がした。

はっとまた下を覗き込むと。

亜麻色の毛を纏った獣が、こちらを見て、悠然と微笑んでいた。

何故微笑んでいたと分かるのか、自分にも分からない。

しかし、何故か分かった。

分かれば、それでよかったのだ。

ジョエルも笑みを返した。

それを見た獣は彼から視線を外し、朝日に向かって空を駆け始めた。

あつという間に、獣は消えてしまった。だが、ジョエルはその姿が、点が消えるまで見送っていた。

獣の姿が見えなくなって初めて、ジョエルは溜め息をついた。

そのとき、そのジョエルの額に何かが高速で直撃した。

「痛っ！？」

額に当たったそれを取ると、ただの古びた金貨だ。
なぜこんなものが額に直撃したのかはわからない。だが、何か理

由があるはずだ。

悩んだジョエルは、テラスの向こうにふわりと降り立ったそれに
啞然とした。啞然として、床に座り込んだ。

済まなそうに、獣が浮いている。

「忘れていた。何かの縁があるはず。受け取って」

さすがにジョエルはもう、我慢できなかった。

解かれた問題・5《邂逅》（後書き）

1000PVを突破しました！

いままでありがとうございました、そしてこれからもよろしく願
いします！

解かれた問題・6

さすがにジョエルはもう、我慢できなかった。

ベッドから飛び起きて、叫んだ。

「台無しだいなしではありませんか！ 私が必死にあなたの素晴らしい姿を目に焼き付けて……ん？」

途中まで叫んで、彼は自分が寝室のベッドにいることに気付いた。しばらく頭を働かせ、それから一気に肩を落とす。

「夢かよ……！」

どうやら自分は夢を見ていたらしい。そう判断した彼はベッドに改めて座り込む。

久々に昔の口調が出てしまった。それぐらい落ち込んでいたのだから。

失望と寂しさが入り交じったようなものだ。子供がお菓子かしの家を見つけたが、それらが全て幻だったぐらいの衝撃なのだ。

かなり悲しい。しかしいつまでも悲しんでられない。

頬を叩こうと手をあげると、左手に何かを握っていたことに気付いた。

拳を開くと、鈍く輝く金貨がある。

思わずまじまじと見つめたジョエルは、自分の口元が笑っていることに気付いた。

ジュンに会いに行こうか。しかし外を見るとまだ日が出たばかりだ。奇しくもあの女性の夢のように。

ジョエルは金貨をポケットに入れ、立ち上がり、テラスに立つ。

朝の露つゆで、森が輝いて見える。

彼が目を閉じようとしたとき、離宮の方で何か物音がした。

そちらに視線を移したジョエルはぎょっとした。

ジュンが立っている。しかし彼女の回りに風が渦巻つまいている。

脳裏にひらめくものがあつた。

まさか、出ていくのか。

届かないかもしれない。でも、行くのを引き止めたい。

ジョエルは久し振りに、声を張り上げて怒鳴った。

「ジュンさん！」

聞こえたのか、ジュンが驚いた顔でこちらを見る。

そして、微笑んだ。彼女の回りに渦巻いていた風が、彼女を覆い
尽くした。

「何を……！？」

ふつりと風が止み、止んだ場所から、凄まじい勢いで何か金色の
長いものが飛び立っていった。

人はこれを、^{せんぼう}羨望を込めて龍と呼ぶ。

それが飛び去ったあとを、ジョエルは呆然と眺めていた。

しばらくして、彼は飛び上がり、離宮に向かって駆けた。

離宮につくと、ジュンが寝転んでいたのだらう、ソファアがまだ
温かい。

そのソファアに、手紙が置いてあつた。

「やっぱり、王宮に泊まるのは止めにしておくよ。祭りでも会える
かどうか分からない。ごめんね……って！ 結局は自分勝手じゃな
いか！」

手紙を叩き付けたジョエルは、紙の下に書かれた名前に瞠目した。
「ジュン……ジュン・タチバナ！？」

「そうだ」

後ろから聞こえた声に彼が振り返ると、国王が渋い顔で立ってい
る。

「名を聞いたときに薄々とは感付いていたのだけだな。恐らく、お
前たちは同郷だ。下手をすれば、宰相どのの祖先、というのもあり
える」

「そんな馬鹿な……」

「では言わせてもらおう。オレがあの人に出会ったのは十年前だが、

あの人の体は全く、何も変わっていないかったぞ」

ジョエルは思わずへなへなと崩れ落ちた。その隣を国王は通りすぎ、手紙を見てがっくりと肩を落とす。

「またこの手か。あの人は前回の砦でも、この戦法でずらかったかな。頑張つて早起きしたと言つに……」

「前に会ったときも、あの人にこうされたのですか。ジュンさんも性質が悪い」^{たち}

溜め息をついたジョエルは、それでは、と踵を返した。

「宰相どの」

呼ばれて、振り返る。

「何でしょうか、陛下」

「もし、またあの人に会うことがあれば、こう伝えてほしい。……王妃に迎えるとの話、こう見えても本気だったのだぞ」

寂しげな国王の後ろ姿に思わず詰まった。しかしジョエルの口元には、僅かながら笑みが浮かんでいた。

「かしこまりました」

ジョエルは離宮をあとにした。

今日、祭りの賑わいのなか、騎士団の団員と会わなくてはいけない。ウォルが案内すると言っていたので大丈夫だ。

しかし、この気分のまま護送されるわけにはいかない。

「……先に酒場にでも寄つて、きつめの酒でも飲もうかな」

正直、実はジョエルは、ジュンに怒っているだけで、そんなに悲しんでいるわけではなかった。

宰相をやっているうちに分かってきたのだが、世界は広いようで狭い。国王がジュンと知り合いだったように、二人が出会ったのがトレラ砦で、今回その砦からの団員に会うように、世界は縁で繋がっている。

だから、またいつか会えるかもしれない。

そのときはしっかり怒鳴ってやろうと、そう心に決めたジョエル

だ
っ
た。

解かれた問題・6（後書き）

これでジョエル編は完結となります。

最終章を終えましたが、あと二本、彼らの後日談を書かせてもらおうと思っています。

お付き合いいただければ幸いです。

導いた金貨

ウォルはせっかちに時計を眺めていた。

「あと一時間……！」

「お前、待ち合わせの場所に来んの早すぎだわ」

隣に立つヒューイの兄貴に呆れた口調で言われ、余計落ち込んだ。
「だって、ジョエルさんを待たしたくないんですもん……」

「まあその心がけだけは、買つ^{むな}といてやる」
肩を叩かれると、余計虚しい。

二人はジョエルとの待ち合わせ、公園で待っていた。まだ祭りのパレードも始まっておらず、場所も祭りの中心地からやや離れているからか、人もあまり来ない。

烏がのんきに頭上を飛んでいった。

ヒューイが呆れたように、なあ、と切り出した。

「どっか酒場にでも行って、時間潰さねえか？ 騎士団の兄ちゃん
はそうしてんだろ？」

「そうですけど……」

「じゃ、先行つてるぜ」

ヒューイはふい、と足を向ける。

古びた金貨を指でもてあそびながら。

ジルはくしゃみを酒場に響かせた。周りの男たちから笑いが飛び散る。

「だれか噂でもしてるのかな……？」

首を傾げてから、瓶の中の酒をコップにつごと傾ける。

酒は切れていたらしく、雫がぽとりとコップに落ちた。

「あーあ……しまった」

財布の中身も軽い。

財布に入れていた例の金貨を眺め、肩をすくめた彼は立ち上がり、酔いざましに外を歩こうと、出口の扉を開き、一步外に出た。

ジョエルはポケットの中で古びた金貨を転がしながら、まだ静かな町を歩いていった。

あれから全く眠れず、結局国王の部屋で延々と愚痴ぐちを漏らしていたが、さすがに出ようと思い、酒場に向かっていく。

彼の行きつけの酒場は、Tの字になった道の突き当たりにある。

左の道から、頭をかきながら面倒そうに歩く男性が現れた。酒場から、やや顔を赤くさせた、青年が出てきた。そして。

「あつ」

ウォルが声を漏らすのと、それはほぼ同時だった。

三人が、まるで謀ったかのように、同時に同じ金貨を落としたのだ。

三人が瞠目し、互いの顔を見る。

一番初めに声をあげたのは、トレラ砦から来た騎士のジルだった。ジルは瞳を丸くし、ジョエルを食い入るように見る。

「あなた！ お名前は何と云うのですか！？」

「わ……私ですか？ ジョエル・タチバナと申しますが」

「タチバナあ！？」

ジョエルの言葉にヒューイが目を見開き、過激かげきに反応した。

「まさかあんた、ジュンの親戚とかなのかよ！？」

「ちよつと待って！ どうしてあなたもジュンさんのことを知っていらつしやるのですか！？」

「私も聞きたいですね！」

二人に詰め寄られたヒューイは、追いついたウォルに助けを求めた。

「待て待て待て！ おいウォル！」

「何故ウォル君を知っているのですか？ まさかあなたが騎士団の？」

「それは僕です！」

ジルが手をあげ、ジョエルが驚いたように彼を見る。

二人の肩に、ヒューイの手が置かれた。

「するつてえと、つまりあんたらが今回、俺の後輩のウォルが受け持った依頼の人らなんだな」

「ええ、そのようですね」

「はい」

「だったら」

ヒューイがにやりと笑い、酒場を親指で指した。

「まだ待ち合わせの時間より一時間も早えんだし、中でゆっくり積もる話でもしようじゃねえか」

三人はそれぞれ、自分がジュンに会った経緯とその後彼女がどうなったかを話した。もちろん現れた幽霊の話も、である。ジョエルの話の際には、少しながらウォルも補足を入れた。

話し終えた三人は、椅子にもたれ、そろって溜め息をついた。

沈黙を破ったのはやはり、我らが兄貴、ヒューイである。

「また何とも、なあ」

「ですね。世界はやはり狭い」

ジョエルが呟き、ジルがしつかり頷く。

「知り合いが三人、集まるとは思いませんでした。聞いたら団長が羨ましかると思いますよ」

「陛下もです」

「案外、ジュンに遭遇するやつって多いんだな。だったら、やっぱ

また会えるかもしれねえってことか」

ジルが猛烈に頷いた。

「僕はそう思っていますよ。トランプしましうって約束しましたから！」

「私も。言いたいことが沢山ありますからね。陛下から伝言も預かっていますし」

「俺はそんなもんじゃねえぜ？ 今度会ったら口説く気だからな」

「おや。陛下は正式に申し込んで、あの人を王妃にする気でいますよ」

「おーっと！ 国王が障害なあ、またハードルの高い相手だな」

繰り広げられる会話と三人に、ウォルはただ見とれていた。

どうしてだろう、三人ともが生き生きとしている気がする。

ヒューイがこんなに快活に笑ったところを見るのも、本当に久しぶりだ。

やがて、四人のもとにビールが運ばれてきた。ウォルは未成年なので残念ながらジュースだ。

ジョエルが嬉しそうに口を開く。

「ではひとつ、彼女との再会を願って、またこの場で出会えたことに乾杯でもしますか」

「いいですねえ！」

「だな」

ウォルも頷く。

四人はそれぞれのものを掲げ、勢いよくぶつけた。

「乾杯！」

導いた金貨（後書き）

これで一連のお話は終わりとなりますが、後日談があります。
是非見てやってください。

龍の咆哮（前書き）

少しグロッキーな描写があります。

龍の咆哮

数年後、ジョエルは予期していた、しかし起こってほしくない事態に直面していた。

北の領主の裏切り、更にゴルザコフ共和国の宣戦布告。せんせんぷこく

そして彼は今、戦の最前線にいる。それも、軍師として。

伊達だてにこちらも準備してきたわけではない。しかし、数十年ぶりの大戦に、多大な死者が出ないはずがない。もともと戦は大量の死者を生み出すものなのだから。

どこの戦線から崩そうか、と溜め息をついたジョエルに、側に控えていた近衛兵このえが笑いを漏らした。

「ゆっくり悩みなさい。どうせ、この戦は勝ったも同然なのだから」
「そうですけど……ってあれ!？」

ジョエルが慌てて兵を見ると、彼女は軍師に支給されたテントから出て行った。

亜麻色の髪がなびく。

ヒューイは組織の判断に従い、アジトを退く最中だった。

ジョエルから、近々このあたりで戦争が起きることも聞いている。あれから四人は連絡を欠かさないようにしていた。だからこそ、戦に出るジョエルとジルが心配なのである。

「あいつら、大丈夫かなあ……」

「そんなに心配なら見ていけばいいだろう」

「そうだけだよ……よ?」

ジョエルは久々に聞く声に、勢いよく振り返る。そこには、やはりなのだろう、中性少女が意地の悪い笑みを浮かべて立っていた。

「……………」

「久しぶりだな」

「……おう」

少女は固まった彼を不思議そうに見てから、これから戦場になるであろう場所を親指で指す。

「どうせ戦はすぐ終わる。見て行け」

気づくと、なぜか少女に腕をとられ、戦場が見える崖の上に立っていた。

「……これって勧誘^{さそい}じゃねえよな、脅迫^{おどし}だよな！」

「当然だ」

愉快^{ゆかい}だと笑う彼女はさあ、と嗤^{ワラ}う。

「ジョエルといったかな。奴が子孫の命の危機になにもしないと思うのか？」

「何だと」

ヒューイは、見た。

ジルは騎士団の副官として、副団長のガラナと共に団長の側に控えていた。

団長は他の砦から集まった騎士たちに宣言する。

「我が母国はクレアスチアと共同戦線を結んだ！ 南の戦線を彼らが、北の戦線は我らが受け持つ。ここをもって、我カリ・エスターバーグは祖国に恥じない戦いをせんと誓う！」

団長の誓いに騎士が雄たけびを上げる。

三人は軍営のテントで、予め決めていた作戦を確認する。そのとき、副団長がいきなり振り返った。

「そこにいんのは誰だ？ 場合によっちゃ斬るぜ」
くつくつく、とテントの暗がりで誰かが笑う。

「てめえも良い部下を見つけたじゃねえか」

聞いた団長の顔色が変わる。

「その声は、まさか……！」

「おっと、俺はただの観戦だぜ。仕事があんのはバジルの死神ヤロ

ウだけだ」

ジルはまさか、と声をあげた。

「バジルという方は、中性な顔立ちの少女なのでは」

「つてことは、お前がヒューイか？」

ん？ 暗がりですら男性が首を傾げる。銀髪が、光に反射して輝く。

「ヒューイ殿とは、知り合いです」

「そっか。ま、容姿が違すがたうわな」

低く笑う声や雰囲気は、ゴロツキを束ねる頭のように思える。

彼の隣に、誰かが立った。眼鏡が光る。

「こいつはジル。前に言っただけですよ、ギン殿」

「おっ、悪い悪い！」

次はジルの顔色が変わる番だった。

「貴方は」

「久々に会うな。元気でなによりだ」

ギンと呼ばれた男性が、面白そうに言い放つ。

「それよりだな、早く外に出ねえと、奇跡を見逃しちまうぜ？」

三人はテントを飛び出した。

男性達に言われて飛び出したジル達も。

少女に連れられて崖にいたヒューイも。

女性を追いかけて外に出たジヨエルも。

ただひたすら巨大な金色の龍が疾駆しゅくし、風を纏いゴルザコフ国軍

のテントや兵糧を次々と破壊していく姿を見た。呆然とするクレア

スチアと騎士団の連合軍を意にも介さない龍は、空に舞い上がり、

天に向かって吼ほえた。

ゴルザコフの兵は皆、武器を落とす。それでも武器を落とさない指揮官たちを、龍は見据え。

瞬間、彼らの目の前に現れた淳は、素手で指揮官達の心臓をえぐ

り取っていた。一瞬の間に。遅れて、金髪がふわりと肩に落ちる。

静寂が両戦線を包んだ。そのなか、淳は金色の瞳で兵士達を睥睨^{みくだ}し、厳かに宣言する。

「抵抗するものは食う。両手を挙げろ」

その声は連合軍にも聞こえたという。

敵味方など関係なく、全員が両手を挙げた。そのなか、ゴルザコフ兵の手首と足首にどこからともなく現れた紐が絡みつき、体の自由を奪ってしまう。

これをもって、連合軍は戦を交えることなく勝利した。

呆然としたヒューイをよそに少女はさて、と腰を上げる。

「仕事でもするか」

「……死人に仕事があるのかよ？」

少女は嫌そうに溜め息ついた。

「私は死神だからな」

それだけを答えた彼女は崖から飛び降り、すたすたと絶命した指揮官らに歩み寄る。しかし淳は何も反応しない。少女の行動に連合軍は呆氣にとられている。

「まさか……ジュンには見えねえのか？」

少女は淳を、目を伏せて見てから両手を広げた。

指揮官の体が光に包まれる。体から白い雪のような輝きが抜け出す。

見つめる一同の前で、輝きは全て空に昇って行った。

それを眺める淳が囁く。

「バジル。側にいるんだね」

少女が悔しそうに俯く。淳は寂しそうな笑みを浮かべ、また彼女に伝える為だろう、はつきりと言葉を口に出した。

「俺、まだ死ねなくなっちまったよ。トランプするって約束した。プロポーズしてくれるらしいから、それも聞かなきゃならない。祭りも結局見なかったしなあ……次は子孫と見たいな。宰相らしいけ

ど、引つ張りまわしてやろうか」

だから、と泣き笑いのような笑みで、空を見た。

「アンヌさんと内都に会ったら、もう少し待って下さいって、伝え
ていてね」

ジョエルはその、静かでいながらはつきりと聞こえる声を聞いて、
涙を流していた。

いつの間にか隣に立っていた女性が、くすりと笑う。

「伝える必要はないわ。今しかと聞き届けたから」

「全くですね」

新たな声に彼が振り返ると、男性が二人立っていた。錆びた鉄の
ような茶髪に眼鏡の男性は、ジルと肌も髪も黒い男性を抱え、片腕
しかない銀髪の男性は金髪碧眼の男性を抱えている。

さらに、銀髪の男性は何故かふて腐れている。

「何で俺宛の連絡は無いんだよ」

女性があごに手を当てて考え込んだ。

「アレよ、何て言っただかしらね……」

「人徳でしょう？」

眼鏡男性が笑顔でさらりと毒を吐く。

「そう、それよ」

「お前らいいように言いやがって……あとで後悔しやがれ！」

銀髪男性が悔しそうに叫んだ。叫んでから、何故かジョエルに指
を突きつけた。

「お前、こいつらみたいな冷血漢れいけつオトコになるんじゃねえぞ！」

「……まるで自分が冷血漢れいけつかんではないような口ぶりですね……？」
眼鏡男性がひやりと笑った。

「ギン殿こそ、後でしっかり後悔してもらいましょうか」

「か、勘弁してくれ！」

和気藹々わきあいあいと騒いでいた三人に呆然としていたジョエルらだが、少
女がヒューイをつかんでこちらに来たのを見て、男性二人はジルら

を降ろした。

銀髪男性が、労うように少女の肩を叩く。

「終わったみてえだな」

「はい」

眼鏡男性が腕を伸ばしてから、ぶっきらぼうに言う。

「行くか」

「ああ」

女性はジョエルの頭を撫でた。

「それじゃあね？」

返す言葉など出ない。

彼らはふらりと枯葉を返すように翻ると、その場から消えた。

五人は、しばらく声も出なかった。

もっとも早く回復したのは、一番関わりが浅かったトレラ砦副団長だった。

「……あれか、オレたちは神様の降臨に立ち会ったってのか」

「だろうな」

団長は日ごろの威厳はどこへやら、両足を地面に投げ出している。

「だーっ！」

ヒューイが叫んだ。

「で、ジュンが起こした事態、どう回収するんだよ！」

「あー……」

ジョエルが眉間をもみ、頭を抱えている。

「……陛下には私から説明するとして。兵士にはどうしましょうか」

「どうするも何も、神が降臨して、しかもこちら側に着いたとしか言い様がないと思うが」

「ですよねえ……」

団長の答えに、想像するだけでも頭が痛い、とぼやくジョエルだが、ジルがはっと立ち上がった。

「そういえば、ジュンさんは!？」

「あ」

五人で慌てて崖を見る。しかしもう彼女の姿は無かった。それでもゴルザコフ兵が怯えているのは、ひとえに連合軍に神のご加護がついていると悟ったからなのだろう。

ジョエルはテントに戻る。

「では、まずは敗残兵をどうにかしますか」

ジル、団長、副団長は唸る。

「帰らなければいけないが……」

「……すつげえ怒られる気がすんのはオレだけか？」

「何があつたのかも説明しなきゃいけませんからね……」

ヒューイはにやにやしながら、崖を見る。

「ウォルは見てねえだろうからな。しっかり話してやろうじゃないか」

じゃあ、と五人は連絡を欠かさないことも約束し、それぞれの仕事や役割に戻っていった。

これで、幸の神ジュンと、彼女に出会った三人の話は終わりを迎えた。

しかし、である。

これから数年後、今回の戦の顛末を見ることが出来なかったウォルは、やや変則的な状況のなか、淳と再会する。

それを聞いた五人と国王に心底羨まれたのは言つまでもない。

そしてそのまた数年後、彼らは、よわい 齢十九になる淳の娘と出会う。

ヒューイと国王が、淳は結婚したのかと悔しがることになるのだが、それもまた別のお話。

龍の咆哮（後書き）

遅くなって申し訳ありません。

ありがとうございました。

「乾杯！」無事完結です。

多くの人に読んで頂けたようでとても嬉しかったです。

それで、なのですが。

皆さんが「乾杯」の中で一番好きになった人物は誰だったのでしょうか？

気軽にお送り（？）下さい

稚拙な文章に付き合っていたいただき、

本当に最後までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2623i/>

乾杯！

2010年10月8日15時07分発行